
仮面ライダー ～Legend Rider Story～

ガラガラ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

仮面ライダー 〈Legend Rider Story〉

【Nコード】

N5447I

【作者名】

ガラガラ

【あらすじ】

なんの変哲も無い普通の世界に住む少年『世翠 誠斗』。

特に能力があるわけでもない彼は、高校の入学式の日に怪人と遭遇する。突然の遭遇に恐怖する誠斗。しかし、人を救いたい一心で怪人に立ち向かった。それは、奇跡を呼び起こした。

「変身!!」

今、新たな物語が始まる・・・

第一話 俺の始業式

「んー、きょうはよく晴れたな」

現代 春。

『世翠^{よすいかいと} 誠斗』の一日が今日も始まる。

少し前に中学を卒業した誠斗にとって、今日は記念すべき高校入学の日だった。

「行ってきます」

誠斗は普段と変わらず家を出る。
でも口元がかすかに緩んでいた。

だが、そんな陽気はこの一瞬で一変する。

人が血を流して倒れていた。

それも一人ではない、何人もの人が倒れている。
中には誠斗と同じ高校の者も倒れていた。

「あ………」

言葉を失い、気をも失いかけたが、誠斗は必死に持ちこたえて倒れている人々に話しかける。

「な、何があったんだ!？」

「—————っ」

蚊の鳴く音のような小さな声。

聞き取ることが出来ない。

「おい、どうしたんだ!？」

「怪・・・物・・・」

「・・・怪物？」

かすかに聞き取れた「怪物」という単語。

「(どういうことだ・・・?)」

その真実はまもなく訪れる。

「グオオ!!!」

間違いなく人の声ではないそれが聞こえた方向を向く。

おかしいな形、シルエットが人ではない。

怪物だった。

誠斗はその状況が一瞬では飲み込めず、ピタリとも動けない様子だった。

しかし、怪物の手が自分の腹に直撃し、吹き飛ばされた痛みで我を取り戻す。

怪物は完全に目標を誠斗に定め、ズカズカと前進を始める。

「う、うわぁ!!」

もはや痛みさえ忘れ、焦り、怯え、怪物から逃れようと逃走の構えをとる。

そのときだ。

「ガタッ」

どこかで物音がした。

それは、逃げようとしている誠斗の出した音ではない。

別の、どこかの誰かの出した音だ。

怪物はそれを敏感に察知し、その音の方向へと向きを変える。

「キャア！」

そこにいたのは、小さな女の子。

どうやら逃げ遅れたらしい。

怪物は今にも殺しそうな勢いで少女へと近づく。

誠斗は体勢を変える。

少女のほうへ体の向きを変えたのだ。

不思議なことに、自分が殺されそうなときは我を失ったが、いざ他の人が死にそうなときは神経が張り巡らされ・・・

助けたいと思った。

「う、うおお！！」

そこらに落ちていた石を投げつける。

効果が無いので手ごろな鉄棒で思いっきり叩いてみる。

「グアア・・・？」

なんら効果の無いようで、誠斗はまた怪物に弾かれた。だが少女は逃げたようで、もう姿が無かった。

「は、はは・・・」

どうしたもんか・・・」

よりいっそう誠斗は鉄棒を強く握り締め、怪物をにらむ。

「グオオ！」

怪物はそれを見て、誠斗へと走りだす。

何とか鉄棒で応戦するものの防戦一方、こちらがダメージを負うばかり。

「ガアア！！！」

怪物は炎弾を乱射する。

誠斗は鉄棒を弾き飛ばされ、自身も地面に倒れる。

これで、実質的に誠斗の勝ち目は無くなってしまった。

「グオオオオ・・・」

ゆっくりと怪物が爪を振り上げる。

そして・・・

「ガアアアア！！！」

怪人の爪が勢いよく振り下ろされる。

「（これまでか・・・！！）」

誠斗はギュッと目をつぶった。

「・・・？」

怪物の攻撃は誠斗へ届いていなかった。
逆に、怪物が吹き飛んでいる有様だ。

「・・・なんだ？」

誠斗の目の前には、何も描かれていない黒い四角形のもの光に包まれてが浮遊している。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

ふいに、腕を伸ばす。

誠斗はその四角形のものを左手で掴む。

「キュイーーーーーッ！！！！」

謎の浮遊感が誠斗を襲う。

同時に謎の記憶^{データ}が脳へと流れ込んでくる。

そして誠斗は気を取り戻す。

気がつく、四角形のものにはマークが描かれていた。

「・・・怪物・・・よくわかんないが、お前と同格で戦えるみた

いだぜ・・・!!」

立ち上がった誠斗はその四角形の物・・・『龍騎のカードデッキ』を目の前に突き出す。

そうすると、誠斗の腰にはベルトが巻かれる。

「いくぜ・・・・・・」

右腕を左上に突き出す。

「変身!!」

カードデッキをベルトへ差し込む。

デッキのマークは光り輝き、誠斗は『仮面ライダー龍騎』へと変身した。

第一話 俺の始業式（後書き）

始めまして、ガラガラと申す者です。

このたびはこの『仮面ライダー 〽Legend Rider Story〽』をござんいただき、ありがとうございます。まだまだ未熟者ゆえ、苦しい部分が多々あると思いますが、そこは初投稿ということで目をつぶっていただき・・・

・・・とりあえず、硬くなるしいのはこれぐらいにして・・・
本当に見てくださったありがとうございます。

初投稿で、しかも仮面ライダー。文章力も足りないんですが、意を決して始めてみました。

これから結構長く連載する予定なので、記憶の片隅にでも置いて偶然思い出したら見てやってください。

第二話 面倒くさいクラスメイト（前書き）

ボロボロ小説第2話！

今回は新キャラ登場です。

心して読んでください！

でも、バトルは無いです。

第二話 面倒くさいクラスメイト

「たあっ、てやあ！」

龍騎の剣であるソードベント『ドラグソード』が怪物を切りまくる。

「グ、グオオオオオ！」

怪物が炎を射出する。

しかし龍騎の斬撃で、炎はいとも簡単に切り裂かれる。

「とどめだ！」

{FINAL VENT}

上空から、龍騎の契約モンスター『ドラグレッター』が飛来し、龍騎を囲う。

「はああああ・・・たあ！」

空高く飛んだ龍騎は、ドラグレッターの炎を受け自身の必殺キックである『ドラゴンライダーキック』を繰り出す。

「たあああああ！」

「グオオオオ！」

キックは怪物に直撃、爆発・消滅した。

「ふう・・・」

ひと段落ついた後、誠斗はすぐに家へと戻った。
病院に連絡し、救急車を要請した。

さいわい死者は一人も居なかったらしい。

誠斗は、その場に立ち会った重要参考人としていろいろ聞かれることに。

もちろん、怪人と変身のことなど言えるわけもないので・・・

・・・様々な言い回しが必要となる訳で。

「(・・・めんどくっせ!・・・)」

数時間後、警察署から帰宅した誠斗は、晴れ晴れしい始業式に出れなかったことを思い出す。

〳〵翌日〳〵

昨日の一件で出席できなかった誠斗は、今日が初めての登校である。

「始業式出てねーからどうするかわかんねえや・・・」

つぶやきながら、正門をくぐる。

他の生徒にまぎれていると、教師らしき人物が誠斗を呼ぶ。

「あなた、昨日これなかった誠斗君よね？私があなたの担任の佐藤さとう真理子まりこよ、よろしくね」

「あ、よろしく願います・・・」

誠斗のクラスは1ー3。

活気にあふれたよいクラスに見える。

だが、問題の誠斗は、

「（うるせえ・・・もっと静かになんねえかな）」

誠斗は基本、めんどくさがりやで人との交流が嫌い（苦手）で友達が少ない。

よりにもよって、高校では中学で一緒だった生徒は一人も居ない。できるだけ静かに、ひっそりとすごそうと誠斗は固く決心する。しかし、その決意はいとも簡単に破られることに・・・

「なあ、昨日なんで休んだんだ？」

「・・・あ？」

「ん？ん？」

突然、誰かが誠斗に喋りかける。

しかも興味津々。

目を輝かせていまかいまかと待ち続けている。

「・・・ず、頭痛腹痛腰痛、下痢に高熱で嘔吐？」

とりあえず休める要因をべらべらと並べる誠斗。

警察に行ったなどと言えばすぐに注目の的。

いやがおうにもうるさくなる。

だから軽く受け流すつもりだった。

しかし・・・

「何で疑問系？お前、面白いな！」

「・・・え？」

予想外の反応。

「大丈夫！」

そいつは、急に辺りをキョロキョロと見回した後、ヒソヒソといった。

なにやら鋭い目線で。

「（・・・あらかた事件にでも巻き込まれたんだろう？そのことは黙っておいてやるから！）」

「ちょ・・・はあ?!」

予想外の展開。

なんと、誠斗は見ず知らずの奴にいきなり昨日の出来事を的中させられてしまった。

「俺の名前は神寺^{かんでらざと} サイト。勘が鋭いのが特技なんだ・・・」

「う・・・お前、一体・・・」

自分の仕掛けたトリックを暴かれた犯人のような仕草で、誠斗はサイトの顔を見る。

そこには、「嘘だよー。お前、ポーカーフェイス出来ないだろー？」と言わんばかりの満面の笑みがあった。

「で、ほんとは何があったんだ？」

「・・・めまいだ」

誠斗はすぐに席を立った。

そして、男子トイレに駆け込み個室に入って鍵を閉める。

「（・・・はめられたー！自分から白状しちゃったー！）」

頭を抱えて焦る誠斗。

これ以上サイトに詮索されると、何が暴かれるか分からない。
1時間目が始まるまで、静かにすごすのだ。と、決めた。

そのゴタゴタも終わり、授業は進んで行った。
事件は、3時間目の途中に起る。

{キューーーーー}ー

「!？」

誠斗の耳を劈く金切り音。

怪物出現を告げる合図と予測した誠斗は、とある策を施行する。

「（こんな最悪なタイミングに・・・クソッ!）」

・・・先生、少し頭痛がするので保健室行ってもいいですか？」

「ん？いいわよ？」

「ありがとうございます」

今の授業が真理子先生だったのが幸いしたか、教室を出ることに成功する。

そうすると誠斗は、細心の注意を払いつつ校外へと駆け出す。
少し行くと、怪物が人を襲っていた。

そこへタックルをかまし、襲われていた人を逃がす。

そして、龍騎のデッキを前にかざし、右腕を左上に突き上げる。

「変身！」

デッキをベルトに装填、誠斗は2回目の変身を遂げた。

第二話 面倒くさいクラスメイト（後書き）

・・・はい、本当にバトルが無かったです、スイマセン。
サイトの出現を説明するだけの回になってしまった・・・
本当はもっと長く書けばいいんだろぅけど、長くなると読むのがめんどくさいかな？（長く書くほどの才能が無いだk（ry
と、勝手に判断しています。
皆さんはどう思いますかね？

さあ、次回は2人目のライダー登場！
誠斗のライダーバトルは激化する！！
・・・になればいいんだけどな・・・

第三話 こいつは善では無いという俺の考察（前書き）

今回もバトル少なめ。

というか先に予告、しばらくバトルは期待しないほうがいいです。

僕は最初を描くのが苦手なので、しばらくグダグダな感じに仕上がっちゃいます。

それでもついてきてくれる心の広い正義のライダーはどうぞ、作品をお読みに！

第三話 こいつは善では無いという俺の考察

「おりゃ、どりゃあ！」

龍の頭を模したグローブ型武器のストライクベント『ドラグクロー』が怪物をガツガツと叩きまくる。

「うおりゃあ！」

「グアアアアアア！！！」

反撃も許さない猛ラッシュの後に、渾身のアッパーで怪人を空高くへ打ち上げる。

「はあああ・・・たああああ！」

打ち上げた怪人めがけてクローを突きつけると、その口から炎の線が射出される。

それは的確に怪物を貫く。

怪物は爆発・消滅し、撃退は完了された。

誠斗は一息ついた後、変身を解除する。

・・・その動作をもっと慎重に行うべきだったと、誠斗は後悔することになる。

「・・・・・・・・・・」

誠斗と同じぐらい身長で、同年齢かと思われる一人の少年にその場面を見られてしまう。

その間、硬直は続いた。

「・・・あー・・・何だ。これはマジックの一種であって、いまその練習をしていたところで。

変身解除したとか、そういう特殊な理由は特に無いって言う「わかってるよ」・・・え？」

誠斗が改めて少年のいる方向を見たときには、もう少年は居なかった。

「?」

不思議そうに辺りを見回す誠斗は、自分が今学校を抜け出していることを思い出し、慌てて引き返した。

（放課後）

「（午前に現れたあいつは何だったんだろう・・・?」

あの後ずっとこのことを考えていた。

おかげで先生に名指しされた時、椅子から転げ落ちるという妙技をクラスメートに披露している。

頭の思考回路がそれにより埋めつくさそうになっている時に、怪物は現れた

「ヴオオオオオオ!!」

今回の怪物は全身灰色で、ガイコツみたいな変な野郎だぜ。

怪物はみんな、こんな気味の悪い姿をしているのか?」

誠斗はさっそくデッキを取り出す。

それを前に突き出そうとすると・・・。

「変身！」

{COMPLETE}

誠斗ではない誰かが、後方で叫ぶ。

そして、1テンポ遅れて謎の電子音が響く。

「!? !?」

誠斗が困惑していると、赤い閃光が辺りを埋める。

その閃光の出現ポイントへ振り返ると、何かがたたずんでいた。

黒いスーツ。

銀のアーマー。

赤のライン。

そして、黄色い眼。

「別の・・・ライダーか!?!」

誠斗がそう叫んだときには、もう戦いは始まっていた。

といっても怪物は完全劣勢、ライダーが圧倒的に勝まさっていた。

その怪物を蹴りで吹き飛ばすと、ライダーはベルトの左側についていたカメラのようなものを取り出す。

次にバックル部分から、何やらキーのようなものを取り出してカメラとジョイントさせる。

{READY}

電子音が聞こえた後、カメラからダランとハンドルが落ちる。
それを掴んだ後、ライダーはバックル部を開いて「ENTER」と
書かれたボタンを押す。

{EXCEED CHARGE}

バックルから、赤いラインを辿ってカメラに赤い光がチャージされる。

「はあああああ！」

そんな少し長い作業を終えた後、ライダーは怪物に向けて走り出す。
助走の勢いも利用して、怪物を思いっきりぶん殴った！

「ウアアアアアアア！」

怪物は勢い良く吹き飛び、赤い巾の紋章を浮かべながら爆発。
青い炎に包まれて、最後は灰になって消え去った。

{ピッ}

バックルから取り出された携帯のようなもののボタンを一つ押すと、
ライダーは再び赤い光に包まれて、変身を解除する。
そこから出てきたのは・・・

「・・・やっ！」

「あ・・・お前!!！」

そう、午前中にふと現れて消えた、あの少年である。

「お前もライダーだったのかよ！ああ、だからあんな言葉を・・・」

誠斗が頭を抑えながらブツブツと呟く。

その体を引っ張り上げ、顔と顔を合わせてその少年は言う。

「――ついてきて！」

「は？」

誠斗は肩をグイッと引っ張られ、半ば強制的に連れ去られる。

「ちょっと、お前待て！せめて俺の意見を「いいから、いいから！」よくねえ！」

他人の意見ガン無視のそいつは、誠斗を引きずって表通りから消え去った・・・。

第三話 こいつは善では無いという俺の考察（後書き）

次回、新ライダー2人登場！

そして、正義の団体も登場！

新たな3人の戦士の説明がある！

誠斗の困惑っぷりに期待！

・・・ぐらい立派でしつかりとした次回予告をいつかしてみたいものです。

この心境、泣けるでえ〜・・・（泣）。

第四話 入団のお誘い（前書き）

もう、本当に戦いのシーンは終わった・・・
畜生！

と、いうわけで四話です。

新キャラを出しちゃうので、ますますバトルが少なくなると予想。
もうキャラ出すのやめようなか・・・

それではどうぞ。

第四話 入団のお誘い

「おい、いつまで引きずるんだよ！ いいかげんはなせ！」

誠斗は引きずられながら、ひたすら叫び続けた。

その抵抗はなんの意味も持っていなかったが。

「だいたいなあ「ついたよ」・・・へ？」

その瞬間、持ち上げられていた誠斗の服の襟えりが離される。

案の定、誠斗は頭を軽く打った。

「いって・・・なんだよ、ホントに」

服の汚れを払いながら、誠斗はあたりを見回した。

窓ガラスは割れていて、壊れた機材がゴロゴロと並んでいた。
俗に言う廃工場である。

しかし、一角だけ新しい感じの空間があった。

ソファア、テーブル、それにどこから電気を引っ張って来ているのか冷蔵庫、テレビ、それらの物がキッチンと並んでいるのだ。

「・・・どこだよ、ここは」

謎の少年を鋭く睨みながら、誠斗が話し始める。

しかし、謎の少年はまったく動じず、逆にニコツと笑いながら返事をした。

「フッフッフ・・・わからないだろう・・・」

「は？」

「ここは俺達の基地。正義の集団・RIDER・Sのアジトなのだよ！」

「・・・は？」

先ほどの緊張の空気はどこへ行ったのか、一瞬で空気が崩壊した。

「まったく、何をいつているんですか」

「まあ本当だがな」

「!？」

突然、謎の2人が機材の影から姿を現した。

一人は眼鏡をかけた誠斗より年上だろう青年。

もう一人は誠斗と同年齢であろう少年。

「何だ、そこにいたんだ。草名護、威伊塚」

「!？、!？」

混乱している誠斗の前に、眼鏡をかけた青年が近寄ってくる。

「すいません、混乱していますよね。僕、『威伊塚 優太』って言います。

えー、あなたを引きずってきた乱暴者が『咲塚 龍介』。

もう一方のこちらが『草名護 篤樹』と言います」

「は、はあ・・・」

「それで俺ら3人は全員ライダーで、さっき咲塚が言ってた通り、一致団結して正義の集団『RIDER・S』を結成している」

「は、はあ・・・」

流れるような説明を受け、誠斗の混乱は消し飛んだ。

だが新たに、疑問が浮かぶことになった。

「・・・何で俺を連れてきた？」

「理由は簡単です。あなたにゆ——「友達になろう！」入団してもらおうと思ひまして！」

咲塚の強引な割り込みをもちともせず、理由は簡潔に説明された。

「俺が入団？ていうか、RIDER、Sってなんなんだよ」

「はい、それはですね・・・」

RIDER、Sはライダー同士が仲間になり、協力して怪人を倒していきます。

知らないライダーに出会って、攻撃されたらたまりませんでしょう？

それに、協力したほうが怪人撃退ははかどりますし。

そういう理由で、偶然出会った僕たち3人で作りました。

このグループに、あなたにも入ってもらいたいですよ」

「なるほどな」

威伊塚による説明が終わり、誠斗は深く考え込む。

しばらくの間、静寂が続いた。

咲塚が誠斗に近寄り、耳元で大きく叫ぼうとした、その瞬間。

「無理です、入団は断ります」

がばっと立ち上がった誠斗は、入団拒否宣言をした後、走って廃工場を出て行ってしまいました。

「・・・あゝあ、断られちゃったよ」

「どうするんだ、まだ誘い続けるか？」

「ん、それしか選択肢は無いんですけどね。」

よし、咲塚。もう一回交渉してきてください。今の私たちは、圧倒的に戦力不足ですから」

「らじゃ」

（翌日）

「なあ、今日お前暗くない？」

「うるせっ」

もうすっかり親友気分のサイトが、誠斗の様子をうかがう。

誠斗は頬杖をつきながら、窓の外を眺める。

昨日の入団勧誘のことを考えているのだ。

「・・・だるっ」

席を立ち、誠斗は屋上へと行く。

風に当たり、髪をなびかせながら深いため息をつく。

「どうしたの？」

「どうしたって・・・ちょっといろいろと・・・うわっ!？」

話かけられ、返事をしながら振り向いた誠斗の目線先には、なんと咲塚がいた。

誠斗と同じ制服を着て。

「何でお前が!？」

「何でって・・・この私立光明院高校の栄えある3年生だからじゃないか!」

「マジかよ!てか、3年生だったんですか!？」

先ほどまで憂鬱に浸りながら髪をなびかせていたとは思えないほど驚く誠斗。

咲塚はそんな誠斗に近寄り、話を続ける。

「何で入団断ったの?別に損するわけでもないのに・・・ていうか、何でそんなに悩んでいるの?」

「そ・・・れは・・・」

誠斗は後ろずさりながら、口を濁す。
そのときだ。

「キューーーーー!」

「モンスター!」

「え!？」

誠斗は走り出し、咲塚はそれを追う。

そうしてたどり着いたのは校舎裏。

モンスターは、人気の少ないその鏡の中にいた。

「これは・・・そうか、俺は鏡の中にも入れんのか」

誠斗が理解したとき、遅れて咲塚も到着した。

「げっ・・・へ、変身!」

そうそうと誠斗は変身し、鏡の世界『ミラーワールド』へと入って
いってしまった。

「・・・はあ・・・」

咲塚は深くため息をついて、鏡の中の龍騎を見守ることにした。

第四話 入団のお誘い（後書き）

本当にバトルがなかった。

龍騎が龍頭で敵倒しただけじゃん！

と、いうわけで次回は冒頭からバトルで間延びさせたいです。

いいや、するね。絶対するね！

と、悪乗りしまくる僕についてきてくださる人は次回をお楽しみに。

第五話 本心（前書き）

ヤッター！

今回はバトル主体だよー！

でもバトルでも会話してるから同じだよー！

イヤツフウー！（涙）

・・・はい、第5話です。

今回は決意の回なので、誠斗を心温かく見守ってやってください。
それでは←R e t ' s G o !

第五話 本心

「うわっ、全部反対か・・・」

ミラーワールド。

そこは全てが左右反対の文字通り、鏡の世界なのだ。

「キシャーー！」

「うおっ!？」

突如、上から蜘蛛形モンスター「デイスパイダー」が落ちてくる。
龍騎はそれを間一髪よけるが、デイスパイダーの猛威は止まらない。
多数の足を龍騎目掛けて突き下ろしてきた。

「あぶねっ！」

〔GUARD VENT〕

龍騎が使用したカード、2つの腹の形をした盾『ドラグシールド』
が召喚される。

「もういっちょ！」

〔SWORD VENT〕

次は、青龍刀の形をした剣「ドラグセイバー」が龍騎の手に現れる。

「行くぜ！」

シールドで足をはじき、セイバーで敵を斬る。
デイスパイダーは大きくバランスを崩し、後ろに転倒する。

そこへ、ここぞとばかりに龍騎のセイバーが振り下ろされる。
しかし……

「なっ!？」

しかし、その刀は多数の足に防御され、弾き飛ばされてしまった。
無防備の龍騎目掛けて、デイスパイダーの足が襲い掛かる!

「――あんな？」

〔ADVENT〕

驚いたふりをしている傍ら、龍騎はアドベントのカードを左手のバイザー『ドラグバイザー』にベントインよみこみしていた。

その効力で、上空から「ドラグレッダー」が現れ、デイスパイダーを吹き飛ばす。

「とどめだ……!」

〔STRIKE VENT〕

ドラグレッダーの頭を模した「ドラグクロー」が龍騎の手に装着される。

「たああああ……デリヤアアアー!!」

クローを突き出すと同時にドラグレッダーが炎弾を発射。

龍騎の第2の必殺技である『昇竜突破』が放たれた。

それに捕らえられたデイスパイダーは、爆発の後に消滅した。

「うーん……」

その光景を鏡越しに見ていた咲塚はずっと悩んでいた。

「（モンスターとあそこまで戦ってるのに、何でRIDERSには入らないんだろう・・・？）」

咲塚が悩んでいると、誠斗が鏡から出てきた。

瞬間、猛ダッシュでその場を離れようとした。

が、今回は咲塚に服の襟を掴まれあえなく失敗に終わった。

「ねえ、何で入団拒否ったの？」

「それは・・・！！」

「！！」

二人はすぐに反応した。

なんと、二人を狙って2体のモンスターが襲い掛かってきたのだ。

「変身！」

「変身！」 {COMPLETE}

その2体は人型で武器を持っていたため、人対人のような取っ組み合いになった。

{SWORD VENT}

{READY}

龍騎はソードベント、咲塚の変身する仮面ライダー『ファイズ』は紅い刀身の剣『ファイズエッジ』。

つまり自らの扱える剣を取り出し、応戦する。

火花の散る戦いの途中、龍騎とファイズは会話を始めた。

「・・・本当に分からないよ」

「へ？」

「何でもここまでモンスターと戦っているのに、RIDER-Sには入らないの？」

「それは・・・」「ごまかさないで、言ってみて？」うっ！

二人は敵を斬り飛ばし、わずかながら隙を作る。

「・・・俺、何ではいらかいかつ・・・て言うത്・・・」

「うん」

「めんどくさい事は嫌いなんです」

「は？」

「あ、いや、なんていうか——うあ!？」

放っておいたモンスターが再び襲い掛かってくる。

それで、龍騎のセイバーが弾き飛ばされた。

そこで、ファイズは携帯型変身ツールの『ファイズフォン』をバツクルから取り出すとコードを打ち込み、フォンを少しだけ傾けると、光弾を撃って怪人たちを一蹴する。

「・・・義務とか、使命とか、協力とか・・・そういうことが苦手なんです、俺」

「ああ・・・」

「だから俺——」

「だったら問題ない、入団しよう」

「——え？あ、いや、俺、なんか・・・」

沈黙が始まる。

「・・・てゆうーか、R I D E R Sは簡単な結びつきなだけで、嫌だったらいつでも抜けていいしー。

もし他に同じようなグループがあっても、そこに入ってもらっても全然結構だしー。

ようするに、俺ら仲間！・・・っていう意識を持って欲しいだけなのだよ、誠斗くん」

「・・・」

「そもそもの前提として、嫌なら自分の力を破棄すればいいんだよ」

そう言って、ファイズは自分のバックル・・・つまりは変身ツールをコツコツと叩いた。

嫌ならこの戦いをリタイアしろ。

そう言っているのである。

「・・・出来ないでしょ？」

飛び掛ってきた怪人をエッジで斬り飛ばし、ファイズは龍騎を見る。

「・・・俺はただ人を襲う怪人たちを倒したいだけ・・・それでも良いんですか？」

「十分さ♪」

ファイズが、エッジにさしていたツール起動キー『ミッションメモ

リー』をマーキングトーチライト『ファイズポインター』へと付け替える。

それを右足に装着、フォンを開けてボタンを押した。

〔EXCEED CHARGE〕

「・・・俺は・・・」

龍騎は、デッキからファイナルベントのカードを引いた。
そしてそれを、バイザーに入れた。

「・・・あ、入団するとケーキがもらえるよ！」

「フッ!!」

〔FINAL VENT〕

最後の最後で空気を破壊しやがった咲塚は再び、しっかりとファイズを見る。

「・・・行くよ？」

「はい・・・!」

二人は空高く上昇し、モンスターにキックを決めた。

変身を解除した2人は、その場にたたずんでいた。

「・・・えっと、入団ってことでもいいのかな？」

「・・・はい!」

2人はともに笑顔を浮かべた。

第五話 本心（後書き）

誠斗入団！

オメデトウ！

今回入団したことによって、話の流れは「誠斗の周辺」から「R I D E R・Sの仲間」へと広がり始めるつもりです。

まだまだバトルはお預けだけど、次回も楽しみにしておいてくださいな。

それでは。

第六話 面倒くさいサポーター（前書き）

今回はただの小説です！

イエイツ！

・・・俺はいつたい何をしているんだろう。

第六話です。

第六話 面倒くさいサポーター

誠斗がRIDER、Sに入団する決意をした2日後、誠斗はRIDER、Sアジトへと向かった。

「・・・確かここだったよな・・・」

物言わぬその圧迫感に、恐る恐る足を踏み入れる誠斗。
そこへ・・・

「ギャアアア！」

「ワアアアア！！」

突然、物陰から現れた咲塚が耳元で大声をあげた。

誠斗は思わず腰を抜き、咲塚は大爆笑しながら話し始めた。

「ごめんごめん、ププツ・・・暇だったから思わず・・・ブツ！」

「はぁ・・・もう、やめてくださいよ・・・」

「えっと・・・今日はRIDER、Sのメンバーに会いに来たんだよね？こっちだよ」

そう言って、咲塚は廃倉庫の中を歩いていく。

相変わらず割れた窓の破片などが雑然と散らかっていて、はだしで入ると痛い目に合いそうである。

そんなことを思っていると、電気を引っ張ってきている場所が謎の、生活用品が立ち並ぶエリアに到着した。

「・・・ん？咲塚か」

そこにいたのは、ソファ―に座り込み黙々と読書をしている青年、威伊塚だった。

「ねえ威伊塚ー、今日は誠斗が遊びに来たんだー!」

「ん? ああ、あなたが前にここへ来た・・・」

「あ、えー・・・世翠 誠斗です」

誠斗がとっさに頭を下げると、威伊塚も「よろしくお願いします」と頭を下げる。

そして、一同はとりあえずソファ―に座ることに。

「とうとうR I D E R、Sに入団してくれましたか。こちらとしては喜ばしい限りですよ、誠斗君」

「あ、どうも・・・」

「ねえ、威伊塚ー。このプリン食べてもいい?」

「入団と言っても、仲間の意思表示をするだけですけどね」

威伊塚が話しながら、誠斗に微笑む。

もともと顔立ちが端麗なだけに、微笑むと下手な女優より美しいから凄い。

「誠斗君は仮面ライダー龍騎として、存分な活躍をしてくれていますよ。あなたがライダーでよかったです」

「そ、そうですか?」

誠斗が表情を緩めた瞬間、威伊塚は表情を変えずに誠斗へ近寄った。

「ところで誠斗君?」

「な、なんですか?」

「・・・あの人、誰だかわかりますか？」

「へ、あの人って・・・」

威伊塚が声を抑え、ゆつくりと誠斗の後ろを指を指す。

その方向にいたのは、廃材に隠れてチラチラ誠斗達を見ている謎の人物。

「・・・怪人!？」

「いや、まだ断定は出来ません。並みの怪人でしたらすぐさま襲い掛かってくるはずですから・・・」

2人が緊張感を高めている、そのとき。

「ギャアアア!」

「ワアアアア!!」

咲塚が先回りし、謎の人物の耳元で叫んだ。

その人物は誠斗と全く同じ反応をして、廃材からすべり出た。出てきた人物とは・・・!？

「・・・サイトオオオ! お前かあああ!!」

「ウエ!？」

叫びを聞いたサイトはとたんにバランスを崩し、床にこけた。

誠斗はソファから立ち上がり、サイトへとどんどん詰め寄る。

「・・・お前、何でここにいる・・・?」

「えっと、あっと、いっと・・・その、あの・・・」

誠斗が満面の笑みで指をポキポキッと鳴らして質問する。

サイトは完全に引きつった笑顔を見せながら、大汗であたふたと顔をゆらす。

「・・・トイレはどこですか？」

「あちら（ヘヴン）です」

その瞬間、倉庫内にはこの世のものとは思えない断末魔が響いた・

・

「で、お前は行動が怪しい俺をつけてここまで来たと・・・」

「・・・ハイ」

頬に大きなあざのあるサイトは、下をみながら誠斗の尋問に答えていた。

「まあまあ誠斗君、それ以上彼をいじめると倒れてしまいますよ」
「プリン食べる？」

咲塚に差し出されたプリンを食べるサイトを誠斗が一発殴った後、話が始まった。

「威伊塚さん、コイツ、どうしましょう？」

「うーん・・・話も聞かれてるみたいだし・・・」

長い沈黙。

威伊塚が頭を抱えて考えていると咲塚がこう言った。

「サイト君は、サポーターをすればいいよ！」
「・・・ハイ？」

咲塚が立ち上がり、サイトの横に座った。

「サイト君は勘が鋭いって誠斗が言ってたし、なんか雰囲気が好きなんだよねえ」

「え？え？そう？そうっすか？」
「ちよつと待ってください。こいつがですか？」

咲塚が強くサイトを勧め始める。
誠斗の反論など無視して。

「うーん、そうですね・・・よし、そうしましょう！」
「嘘やん。即答っすか」

誠斗の抗議も虚しく、決定は下された。

「祝☆俺サポーター任命!!」
「いえーい！」
「ウソダッ！」

2人が勝手に盛り上がり始める。
威伊塚も、笑顔で歓迎している様子。
唯一、誠斗がどん底に陥っているが気にしない。

「それで・・・」

R I D E R、Sって何？」

「そこからかっ!!」

その後は、威伊塚による楽しい☆ライダーと怪人講座が開かれた。

そんなこんなで、誠斗は何をしにきたのか分からないまま今日と言う日を終わらせたのであった・・・。

第六話 面倒くさいサポーター（後書き）

次回から・・・

とくに変化ありません。

もう、ふつーに書きます。

もう、俺はあきらめた！

ウェーイ！

第七話 龍と戦の大合戦（前書き）

スンマセン、更新遅れました。

今回もまたライダー色なしです。

I t i s t h e r i d e r c o l o r n o n e t h i
s t i m e d u s .

それでもいいならお願いします！

第七話 龍と戦の大合戦

「そういえば、RIDER、Sってもう一人いるんですね？」

誠斗の通う私立光明院高校、その昼休みの屋上。

ベンチで焼きそばパンを食べている誠斗は、同じくメロンパンを食べている咲塚に質問した。

「うん、いるよ。超がつく天才がね」

「へえ」

咲塚が人差し指を立てて説明する。

「名前は『草名護 篤樹』。

こことは違う高校に通う高校一年生。

成績優秀運動万能に美形がひつついたスーパーウルトラボーイ。

生徒会会長も務め、決断力もあるその性格から、誰よりも人気のある男子だよ」

「へ、へえ……」

同じ高校一年でここまで差のある誠斗は、一瞬にして表情を曇らせる。

そんな誠斗に咲塚が提案する。

「草名護に会おうか！」

「えっ!？」

いつのまにか決定したことに、誠斗は驚きながらも期待も膨らんだ。

「・・・あ、でも・・・うーん・・・あいつなあ・・・」
「えっ!？」

突然、言葉を濁し始めた咲塚。

そんな態度に、誠斗は不安も感じ始めてしまった。

「とりあえず、がんばってね・・・。俺、今日補習があって行けないから!」

「えっ!？」

先ほどから エッ!？ しかいていない誠斗だが、最終的にはモヤモヤとした心境で咲塚との会話を終えるのだった・・・。

↓放課後↓

「うーん・・・」

誠斗は今、RIDER・Sアジトの目の前にいる。
あれこれ悩み、もう30分もここで立ち往生している。

「あれ、誠斗君じゃないですか」
「ん？」

後ろへ振り向くと、そこにいたのは威伊塚だった。
なにやら分厚い本を抱えていた。

「なにしているんですか？行きましようよ」

「え、ウソ、ちょ・・・」

誠斗は悩むことを終了させられ、アジトへと連れて行かれた。

「やあ、草名護」

「ん？」

誠斗が恐る恐る目を開けて見たその光景は、あまりにも想像と違った。

服装は乱れ、

テーブルに足を乗せ、

足を組み、

携帯をいじりながら、

テレビを見ている。

そんな、いかにも成績悪そうな自分と同年齢っぽい少年が、今自分の目の前にいるのだ。

「・・・・・・？」

「あ、誠斗君。彼が草名護です」

数秒間、誠斗は理解不能に陥り動きが停止していた。

「威伊塚、この馬鹿そうなやつは誰だ？迷子の赤ちゃん？」
「！！！」

草名護の、誠斗への第一声が・・・。
誠斗の堪忍袋の尾を切った・・・。

「・・・んだと、このクソ不良！」

「誠斗君!？」

誠斗は右の拳を握り締め、草名護へけんかを売った。

「・・・なんだと？」

「なんだ、耳が腐って聞こえなかったか？このクソ不良！」

「・・・なんだと、この野郎！」

「ああ？やるかこの野郎！」

「2人とも！」

草名護はソファーから勢いよく立ち上がり、誠斗のほうへにじり寄っていった。

なんと、出会って10数秒で喧嘩に発展してしまったのだ。

お互い全く引く気配も無く、ただ己の殺気を相手に撒き散らすだけだった。

「・・・2人とも、やめてください」

威伊塚の制止も聞かず、にらみをきかす両者。

時間の経過は、ただただ2人の怒りを燃え上がらせるだけだった。

「俺こそが選ばれた人間なんだよ。つまり、俺が絶対。俺こそが正義なんだよ！」

「脳みそが腐ってるからそういう捻くれた正義感を持てるんだよ、この独裁者が！」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

あまりの喧嘩にとうとう対応しきれなくなったのか、突然、威伊塚が黙り込む。

と思われた次の瞬間。

「2人とも!! やめてください!! 意味も無く喧嘩なんて馬鹿げています!!」

「「えっ・・・!?!」」

つい先ほどまでマグマのように煮えたぎっていた2人の喧嘩が、一瞬で終わりを告げる。

おまけに、2人とも一気に表情が青ざめていく。

「ど、どうしたんだよ威伊塚・・・」

「あ・・・う・・・」

それ以降、威伊塚からの返答は無く、威伊塚はしばらくしたらその場を去った。

「・・・フ、フン!」

草名護は思い出したかのように悪態をつき、またソファーへ戻っていく。

しかし、本当は2人とも完全に喧嘩する気は失せていたのだった・・・。

第七話 龍と戦の大合戦（後書き）

じ、次回はきっと闘いが繰り広げられる！

・・・予定。

きっとgdgdだろうけど、記憶の片隅に置いて気に向いたら
読みに来てください・・・。（つゝ）・・・

第八話 怒りの訳（前書き）

今回は前回までに比べ、少しだけ長くなっております。
あんま関係ないけど。

さあぁ、ついに3人目のライダー出現です！

とうとう本格的に仮面ライダー小説として始動し始める予感・・・！

と、いうわけで始まりです。
どうぞ。

第八話 怒りの訳

「・・・はあゝ」

誠斗は今、屋上にいる。

一日中悩んでいることがあった。

もちろん威伊塚のことであるが・・・。

「なんか、普段怒らない人ほど怒ると怖いって言うしなあ・・・どうしよう」

ずっとこの調子である。

「あ、誠斗」

「ん？ 咲塚さん」

そこにフラッと咲塚が現れた。

誠斗が事情を話すと、咲塚はこう説明した。

「うーん・・・これは難しいことになったなあ・・・」

「どういうことですか？」

「威伊塚はねえ、なんていうか、平和が大好きなんだよ」

「はい？」

咲塚の、集約されたその一言を、誠斗は理解できなかった。
それを見てか、咲塚は説明を続けた。

「あのねえ、威伊塚は昔いじめを受けていたんだって」
「え・・・本当ですか？」

「うん。それで中学2年のときに登校拒否して、性格は荒れて今じゃ考えられないくらい酷かったとか・・・」

感傷的な過去の話に、しばらく沈黙が続いた。

「でも、それが今とどう関係あるんですか？」

「なんか、その後自殺しようとしたんだって」

「嘘ォ!？」

衝撃的な事実に驚くことも仕方がないが、そのとき誠斗に集まった視線は銃の弾丸より痛かったとか・・・。

「そこに見知らぬ大人の男性が来て、止めたんだってさ。そこで、『なにをしてるんだ、そんな簡単に命を捨てるなよ!』・・・って言われたんだってよ？」

「へえ・・・」

「その言葉に心打たれて考えが一転し、登校もするようになった・・・とか」

「・・・ちよつとまってください」

威伊塚の過去が説明されるやいなや、誠斗が疑問点を述べ始める。

「それが『平和が好き』とどう関係するんですか？」

「ポイントはそこ!」

咲塚が誠斗を指差し、少し大きな声で指摘する。

このとき集まった視線は、もはやバズーカ並みの痛さであった。

「・・・威伊塚は今19歳の大学2年なんだけど、あいつは中学3年のときにここへ引っ越してきたんだよ」

「へえ、そうなんですか」

「3学期も終わりに近い、2月頃だったらしくて。そこで問題が生じたんだよ……」

そのクラスにはいじめられてるやつがいて。

いじめてる男子グループは教室の中で堂々とやってたんだけど、他の生徒は皆関わりたくないらしくて、無視していたらしい。

そこへ、すかさず威伊塚が止めに入ったんだけど……」

「やり返された？」

「その通り。」

威伊塚の制止は何の効果も無く、唯一よかったのはいじめの標的にされなかったことぐらい。

その後もいじめは続いた。

そして、とうとう3月にはそのいじめられてたやつが来なくなっ
て……。

次に威伊塚がそいつを見たときには……

そいつは棺桶の中だった」

「えっ……!？」

どうやら咲塚の説明によると、いじめられていた生徒は登校拒否後、
気が狂い動転して、とうとう自殺してしまったらしい。

「威伊塚はそのとき、『自分がもっと本気でいじめを止めていれば・
……』と思っただけらしい」

「だからあのとき……」

そこで予鈴になり、午後の授業が始まった。

依然、誠斗のもやもやは解消されなかったが……。

「・・・はあ」

ここにもまた、誠斗と同じように悩んでいる青年がいた。
眼鏡の大学生・・・威伊塚である。

「喧嘩が起こってしまった・・・。しかも、それに一喝してしまうなんて・・・」

どうやら、喧嘩が起こってしまったことと、自分が怒ってしまったことを悔やんでいる様子だ。
傍から見ても分かるぐらい、暗い雰囲気であった。

「・・・あいつがライダーですか？」

「・・・そうだ」

「・・・なんだか余裕っぽいですね」

どこかで、誰かがつぶやいた。

威伊塚はそれに気づき、振り返ったり辺りを見回したりしたが、それらしい人物は見当たらなかった。

と、そこへ・・・。

「すみません、道が分からなくなってしまったのですが・・・」
「・・・へ？」

驚いて振り返ったそこにいたのは、何の変哲も無い一般人女性。
威伊塚は自分を落着かせ、対応を始めた。

「えっと、どこへ行きたいんですか？」

「それは・・・」

あなたの地獄へ」

「！！」

突然、その女性は威伊塚に殴りかかった。

間一髪、それはよけられたがすぐに蹴りが入った。

「ガッ・・・！」

なんと、威伊塚は受け止めたはずの蹴りにより、はるか後方へと飛ばされた。

それはあきらかに人の出せる力ではない。

そう、モンスターのものだ。

「フフッ、さすがにこれじゃ無理ねえ・・・」

それだけ言うと、女性の姿は変貌を遂げた。

虫のような怪物・ワームである。

「くっ、ワームか・・・！」

威伊塚は自らが変身するためのアイテムを取り出した。

それは、青い笛。

体を鬼へと変化させる、『変身鬼笛・音笛』おんてきである。

それを軽く振ると、2本の角が起き上がり、待機音のような音が鳴り始める。

威伊塚がそれに息を吹きかけると、高い音が鳴り響いた。そのまま、それを額に持っていくと、威伊塚の額には鬼の紋章が現れた。

その状態で鬼笛を横に振ると、竜巻のような風が威伊塚の体を包み込んだ。

しばらくすると、変身完了した威伊塚が、風を断ち切る！

現れたのは、黒に青の縁取りで、手には銃型の武器である『音撃管・烈風』を持つ、鬼の戦士。

仮面ライダー威吹鬼であった！

第八話 怒りの訳（後書き）

今回は、ついにあの超人気有名人の名前をかたどった高校一年生が変身します。

ちよつとは面白くなるかもしれません。

後、更新が最近乱れ気味ですけどしっかりとがんばるので、今後も温かい目で見てやってください。

それではまた次回。

第九話 救出・イクサ・フィストオン（前書き）

新年あけましてオメデトウございます。

ついに4人目のライダー出現！

キーワードは753です。

知ってる人はすぐに分かるけど・・・。

ちよっぴりは面白くなった今回、特に特筆すべき点はない・・・よな。うん。

それでは第九話、どうぞ。

第九話 救出・イクサ・フィストオン

「はぁ、てやぁ！」

「フッ、たぁ！」

2人の激戦は続いていた。

威吹鬼は武器である烈風から、圧縮空気弾を連射する。

それに対抗して、ワームは超高速移動能力『クロックアップ』を使用する。

目にも留まらぬスピードで、威吹鬼に攻撃を仕掛ける。

「ワームとは既に3回戦った……。クロックアップも慣れている！」

威吹鬼は言ったとおり、見事にワームの攻撃をよけ、逆に弾を撃ち込んだ。

「グッ、クソォ！」

攻撃を決められたワームは、やたらむやみに動き回り、照準をずらすという作戦に出た。

「やたら動いても、消耗するだけですよ？」

そういうと威吹鬼は、烈風から赤い鬼石と言われる実弾を発射、見事に命中させる。

それを喰らったワームは動きを止め、倒れこむ。

威吹鬼は次に、バックルから『音撃鳴なるかぜ鳴風』を取り、烈風の先端につける。

最後に、烈風に収納されているマウスピーチを取り出し烈風の後部に取り付ける。

そしてマウスピーチにマスクを当て・・・

「音撃射・疾風一閃!!」

次の瞬間、烈風からワーム目掛けて波状の清めの音を放つ。
それを受けたワームは鬼石が眩く輝きだし、よろめきながら爆発した。

「いやー、実に見事だったよ」

「!!」

その台詞が聞こえた途端、威吹鬼の意識は途絶えた。

「これは実にいい餌になりそうだ・・・フフッ」

「・・・・・・・・」

「・・・・・・・・」

「・・・ねえ」

威吹鬼が大変なことに巻き込まれている最中、RIDER、Sアジトも大変な空気が渦巻いていた。

「・・・誠斗、なに読んでる「小説」あ・・・そう」

「・・・草名護、なに見てる「テレビ」あ・・・そう」

ご覧のとおり、3人いるが、うち2人は全くの無言。
残る1人がとても居づらい雰囲気になっているのだ。

「ピピピッ♪」

その空気をさえぎるように、誰かの携帯がなり始める。

「・・・俺のか」

草名護が携帯に出る。

「・・・もしもし」

「あ、草名護君ですか？あなた方が嫌う怪人でございます」

その瞬間、一気に草名護の表情が険しくなる。

「・・・何のようだ」

「あなた方の仲間である威伊塚君、仮面ライダー威吹鬼を捕まえま
した」

「何だと・・・!？」

その会話を聞いていた誠斗は、草名護の声しか聞こえないが、大体
めんどくさいことだと理解した。

「威伊塚君は今眠っています。ですが、後1時間ほどで我らモン
スターの餌になってもらいます」

「お前、ふざけ」「我らが喰らう前に助けたければ、今から言う場所
に来てください」・・・」

その後も、草名護は説明を聞き、電話を切った。
椅子から立ち上がり、指定された場所へ向かおうとする・・・が。

「何だか知らんが厄介ごとだろ。一緒に行かせてもらうぜ」
「・・・好きにしろ」

誠斗が事情を察し、草名護の後を付いていった。
なんのこともかさっぱりな咲塚は1人、アジトに残るのだった。

1人気の無い地下駐車場――
「ここか・・・」

車が数台並ぶだけの地下駐車場。
そこに2人はいた。

「ようこそ。仮面ライダー」

その声が鳴り響いた瞬間、1人の紳士が現れた。
同時に、数体の怪人が現れた。
うち一匹は眠っている威伊塚を抱えていた。

「さあ、威伊塚君は私達に勝ったら返してあげましょう」

その紳士はゆっくりと草名護たちに歩み寄り、変貌を遂げた。
灰色の体色を持つ怪人・オルフェノクだった。
すかさず誠斗はデッキを突き出し、ベルトを出現させる。

「下がれ」

「は・・・？」

誠斗を押し退け、草名護は前に出る。

その手にはベルトがあつた。

そしてベルトを回し、腰に装着する。

次にポケットから何かを取り出した。

それは、ベルト装着者を変身させるキー『イクサナックル』であつた。

草名護はそれを右手でしっかり握り、左手のひらに当てる。

「レ・ディ・ー」

待機音の鳴っているナックルを持っている右手を、真っ直ぐ右に伸ばす。

「変身！」

一度胸の前で構えなおし、そのままベルトにはめる。

「フィ・ス・ト・オ・ン」

電子コイルと共にバックルから黄色いエネルギー状態の頭部アーマ―が飛び出す。

それはじよじよに全体のアーマ―を構成する。

最後にイクサを象るクレストが、そのアーマ―を草名護と合体させ

る！

そう、草名護は仮面ライダーイクサであったのだ。

第九話 救出・イクサ・フィストオン（後書き）

R I D E R、S内のモヤモヤ事件もついに次回終了！の予定。

次回もいきなり戦っていきます。

少々、あんまり、結構分かりづらいと思いますけど、がんばってみます。ハイ。

それでは、また次回。

第十話 威伊塚救出大乱闘（前書き）

今回は全編、戦いという稀に見る展開となっています。

やっとな仮面ライダーっぽくなってきたかな・・・。

そういえば、前回に「RIDER」内のモヤモヤ編は次回で終わる」的なこと言ってたと思うんですけど・・・、
終わりました！

ちよつと戦いで1話使ってしまった・・・。

そんな感じの10話です。

どうぞ。

第十話 威伊塚救出大乱闘

「お前らの命、俺に捧げろ」

イクサがそう言うのと、マスクが激しい衝撃と共に展開した。

その後、イクサは剣と銃を併せ持つ自身の武器、「イクサカリバー」を取り出した。

「喰らえ・・・！」

カリバー・ガンモードから弾を連射する。

命中精度はかなりのもので、きれいに威伊塚だけを避けて怪人にヒットした。

すると、怪人は手を緩めて威伊塚を離してしまう。

「（今だっ！）」

ここぞとばかりに誠斗は走り出し、威伊塚を救出する。

その勢いで怪人の後方まで走りこみ、威伊塚を地面に置く。

そして回転して怪人方向を向くと同時に右手を左上に上げ、デッキをベルトにセット、変身した。

「さあ、お前らもここでお終いだ！」

龍騎はファイティングポーズをとり、イクサはカリバーを剣型のカリバーモードにして構えた。

それを見て、怪人達も変身をした。

グロンギ、アンデットにイマジン、ファンガイア・・・種類が豊富のようだ。

「お前ら・・・行け！」

それを合図怪人達は一斉にライダーへ飛び掛る。

龍騎は既にソード・ストライク・ガードベントをベントインしており、右手に龍頭・左手に刀・肩に盾のフル装備状態だった。なので多少の攻撃ではビクともしなかった。

「お・・・りゃあ！」

飛び掛ってきた怪人をはじき返し、うちの一体を斬りつける。そうすると斬られた部分を押さえて地面に倒れこむ。別の怪人の攻撃を盾で防ぎ、次はクローで叩き込む。

イクサの方といえば・・・

「もう終わりか？」

なんと、例のオルフェノクを残し圧勝していたのである。

「ク・・・」

「それなら・・・」

イクサはベルトの側面から必殺技発動に使う笛型のアイテム「フェッスル」を取り出した。

そして、バックルに差し込もうとした瞬間・・・。

「グアアッ！！」

「！！」

突然、誠斗の悲鳴が響き渡る。

その瞬間、微かに隙が生まれた。

その一瞬をオルフェノクは見逃していなかった。

「隙ありっ！」

「なっ!？」

イクサの腕を蹴り上げる。

その反動でイクサはフェッスルを離してしまう。

フェッスルははるか後方へと吹き飛んだ。

同時にオルフェノクはイクサの腹に拳を叩き込み、よろめかせる。

「残念だな！」

攻撃を喰らい反撃できなかったイクサに、追い討ちをかけた。

その攻撃の前に、あのイクサも地面に倒れこんだ。

それを見て勝ちと理解したのか、オルフェノクは龍騎のもとへと向かっていった。

「クソ・・・が・・・！」

龍騎は地面に膝を付き、シールドが粉碎しダメージを負った左肩を押さえていた。

「ハハハ！仲間を救おうとしてその様か！」

「ハッ・・・意識無い威伊塚を襲おうとする薄汚いやつがなに言っ
てやがる・・・！」

「それが遺言か？」

明らかに戦えない龍騎を前に、イマジンは止めの一撃を放とうとする。

しかし・・・

「グハッ!!」

突然、黄色の衝撃弾がイマジンを吹き飛ばす。

しかも、吹き飛んだイマジンはうめき声を上げながら爆発した。

一同は驚きながら後ろを見る。

そこにいたのは、ベルトから外されたナックルを構えたイクサであった。

今イクサが使った技は、ナックルからエネルギーを放ち敵を粉碎する「ブロウクン・フアング」。

先ほどオルフェノクにダメージを食らわされたイクサは、復活と同時に別のフェッスルを使用し、技を放ったのである。

「目にもあてられねえなあ・・・龍騎士もどきが」

「にしてはお前もボロボロに見えるがなあ・・・?」

両者ダメージを負っていても口だけは減らない模様。

だが、なぜか以前の喧嘩よりも怒りがこもっていないようにも思える。

「ハアッ!!」

「うおっとい!」

しかし、まだ油断は出来ない。

いくらイマジンを倒したとはいえ、まだオルフェノクとアンデッドが残っていた。

「もう勝った気でいるのですか？ボロボロのあなた達が！？」

オルフェノクが龍騎の首を絞め、上に持ち上げる。

龍騎がうめき声を上げながら手を振り払おうとするが、既にその力は残されていない。

「俺を誰だと思っている？」

その瞬間、イクサがオルフェノクを切り裂いていた。

後ろにいたアンデッドは何が起こったか分からず、ひたすら呆然としていた。

切り裂かれたオルフェノクは横に飛ばされ、壁に激突した。

もちろん龍騎は開放され、地面に落ちた。

「あーあー、俺が少し本気を出せばこんなもんだよ」

「フン、余裕じゃねえかよ。それなら最初から助けろってんだ」

「『脳ある鷹は爪を隠す』ってことわざがあるんだぜ？」

イクサの手を借り、龍騎が立ち上がる。

2人の怪人も、既に起き上がっていた――

「「おらー！！」」

――が、2人の息ピッタリの同時キックに吹っ飛んでしまった。

「・・・行くぜ」

「俺は命令されるのが大嫌いだ。だがまあ、その作戦に乗らないこ

とも無いがな」

「減らず口だなあ、お前は」

龍騎はそう言いながら、デッキからカードを一枚取り出す。

龍騎の紋章が真ん中に書いてある、ファイナルベントのカードだ。

イクサは、先ほど飛ばされたフェッスルを既に回収していたのか、バックルに差し込む。

そしてナックルをバックル方向へ押し込んだ。

〔FINAL VENT〕

〔イ・ク・サ・カ・リ・バ・ー・ラ・イ・ズ・アツ・プ〕

その電子音声と共に、龍騎はドラグレッダーと上に跳ぶ。

イクサは、カリバーモードのカリバーを顔の左辺りに構える。

相当なエネルギーなのか、イクサの右腕からカリバーにかけて電撃が走っている。

「「はあああああああああ！！！！」」

2人の怒涛の一撃は、2体の怪人を一気に貫いた。

第十話 威伊塚救出大乱闘（後書き）

とうとう次回こそは終了するかわかります、このRIDER-S事件。

そして、話は一気に急展開を見せる！！
かわかります。

そんな予定をしている中で、また次回。

第十一話 急襲（前書き）

今回は節と節の合間と言うことで、なにやらアンバランスかつ少量になってしまいました。

次回から挽回していくので、ここは大目に見てもらえればうれしいなあゝ・・・って感じです、ハイ。

それでは十一話、どうぞ。

第十一話 急襲

凄まじい攻撃の後は、モクモクと立ち上がる黒煙と地面に残る傷痕であつた。

「威伊塚！」

誠斗は変身を解除し、すぐに威伊塚のもとへ向かった。

草名護も遅ればせながら変身を解除して、ゆっくりと威伊塚のもとへと向かった。

「ん・・・ここは・・・？」

「えっと・・・威伊塚さんを誘拐したって怪人から電話が掛かってきたんです」

「指定の場所に来たらお前がいた」

「へえ・・・」

どうやら威伊塚はもう理解したらしく、既に立ち上がり笑顔を見せている。

「では帰りましょうか、アジトに」

くRIDERくSアジトく

「あ、おかえり」

咲塚は何とも無かったようにテレビを見ていた。

威伊塚は自分の本のもとへ行き、これまた平然と読み始める。

「（・・・あっ・・・）」

咲塚が気づいたのは、残りの2人である。

ご存知、犬猿の仲である2人、また何かのきっかけで喧嘩が始まるのでは、と咲塚は気がでないのだ。

ひやりと汗をかきながら、誠斗を草名護から離そうとする。

「えっと、誠斗——「草名護、携帯なってるぞ？」」

「ああ、ホントだ」

「・・・え？」

2人はごく普通の会話をこなし、ソファアに座った。

「誠斗、そのリモコン取ってくれないか？」

「ああ」

「・・・・・・」

何食わぬ顔でリモコンを取る誠斗。

そして、それを貰いこれまた何食わぬ顔でテレビを見る草名護。

「・・・何で？」

「どうした？咲塚」

「あ、いや別に・・・」

咲塚は眉間にしわを寄せ、深く考え事を始めた。

威伊塚はそれを軽く笑いながら見ている。

「・・・イダ・・・ツシュ」

ぼそりとつぶやかれたその声は、誠斗たちには届いていなかった。しかし、別の何かに気づいた草名護は突然立ち上がりイクサナックルを取り出した。

そしてナックルから電磁ショックを放つ。

それは、紫色の斬撃のようなものと衝突する。

どこから飛んできたそれは電磁ショックより威力が高かったが、軌道をそらされた。

その軌道はソファーなどの家具が置いてある辺りの少し横だった。それが地面に激突すると小さな爆発がおこる。

「な、なんだ!？」

「誰かが俺らを狙っていた・・・」

いつのまにか草名護はベルトを巻いており、ナックルを拳に打ち立てていた。

「変身!」

「フィ・ス・ト・オ・ン」

イクサは、カリバーを構えて横のビルへと走っていった。

「僕らも気が抜けませんね・・・!」

威伊塚も烈風を構え、音笛を口の近くまで持っていていた。

{BURST MODE}

「そこか!」

烈風の弾丸と、銀色の弾丸が激突した。

「誰だ！」

威伊塚の叫び声が、倉庫に響く。

その残響が消えると、別の声が聞こえてくる。

「さすが、威吹鬼。射撃性能は高いですね」

そう言いながら現れたのは、体中に白いラインが走り、頭部に△を模したマークがあしらってある目がオレンジ色のライダー。

『仮面ライダーデルタ』だった。

「さあ、始めましょうか」

第十一話 急襲（後書き）

とうとう5人目のライダー出現！

謎の襲撃の意味は？

そして別のビルへ移ったイクサはいったい誰と戦っているのか！？
（って感じの予告が出来るようになった。うれしいです。）

真相は、次回までしばしお待ちを・・・。

第十二話 黒き混沌（前書き）

ついに物語が本格的（予定）に動き始めます。
今回はその皮切りと言っていいでしょう。

自分の文章力が追いつかず、あまり臨場感の無い戦闘かもしれないので、緊迫するようなBGMを脳内再生しながら見てくれるとありがたいです。
それでは、どうぞ。

第十二話 黒き混沌

くビル・屋上く

「何だ、お前は・・・」

イクサが、腰を落としてカリバーを構え、隙あらば攻撃してやろうと睨みをきかしていた。

「どうでもいいだろう？ そんなこと。俺は戦いたいんだよ・・・」

相手は紫色のアーマーで身を包み、緑色の複眼を光らせている。

自身の武器である紫色の剣『サソードヤイバー』を構えるそのライダー。

名を仮面ライダーサソードと言う。

「戦闘狂が・・・！」

イクサは一気に走りこみ、サソードへカリバーを振り下ろす。

サソードはそれをヤイバーで受け止め、素早くはじくと逆にイクサを斬りつけた。

ダメージによるうめき声をあげながらも、イクサは回し蹴りでサソードを退けた。

「以外とやるな、このサソリ野郎がっ！」

カリバーをガンモードへと変え、サソード目掛けて何十発もの弾丸を放つ。

しかし、サソードはその殆どの弾丸を切り落とした。

同時にイクサとの距離を詰め、再び斬りかかる。

「この程度か？」

「クッ・・・！」

間一髪カリバーでサソードの攻撃を防いだイクサだが、防御をすることによって身動きが取れなくなってしまう。

「オラアッ！」

「ガアッ！！！」

イクサの腹へ、サソードの蹴りが入る。

その衝撃でイクサの防御が緩む。

それをいいことに、サソードの攻撃が連続で繰り出される。

隙の無いその攻撃によって、もはやイクサはサンドバック状態である。

（RIDER、Sアジト）

「ハアアッ！！！」

「フン！」

こちらは、2人の銃を持つライダーによる銃撃戦が繰り広げられている。

その状況は五分五分・・・いや、僅かにデルタが勝っている。

「ほらソコ！」

「グッ！」

コンテナに乗っているデルタの銃弾が一発、威吹鬼の足に当たる。バランスの崩れた威吹鬼へ、デルタの集中砲火が飛ぶ。

「やらせるかぁ!!」

{BURST MODE}

突然後ろから龍騎とファイズが走ってくる。

龍騎は2つのドラグシールド持ち威吹鬼の前に立つ。

ファイズはその後ろからファイズフォン・バスターモードの光弾を撃ち、デルタの弾と相殺させる。

「ありがとう、二人とも！」

威吹鬼は龍騎の後ろから走りながら出て、弾を撃ちまくる。その不意打ちに、さすがのデルタも移動せざるおえなかった。

「そのままではいろよ・・・」

いつのまにか龍騎は、ドラグクローを召喚して構えていた。それにあわせてドラグレッダーも空から舞い降りてきた。

「喰らえええ!!」

構えたクローを前へ一気に突き出す。

ドラグレッダーもそれに合せて火炎を打ち出す。

龍騎の2つ目の必殺技『昇竜突破』である。

その高威力の技は、デルタの乗っているコンテナを爆発させた。その爆発に、デルタは飲み込まれた。

「よし、撃退完了！」

「少しやりすぎたよ、誠斗お」

「ス、スイマセン・・・」

既に勝利ムードの3人のもとに、大きなエンジン音が聞こえた。

「まだ終わってませんよ・・・」

そう、デルタは無事だったのだ。

ファイズ系ライダーの呼び出せる大型バイク『ジェットスライガー』に乗り、空中で停止していた。

「そして、今が終わりです・・・！」

「・・・やばい、逃げるんだ！誠斗、威伊塚！！」

デルタがなにをすることが分かるファイズは、2人に叫ぶ。

しかし、そんなこともおかまいなくデルタが操縦席のディスプレイを操作し、3人をロックオンする。

そして、画面に「BLAST ON」と表示されたボタンに指を伸ばす・・・！

「グアアアッ！！」

突如、上からイクサが叫び声をあげながら落ちてきた。それはデルタにぶつかり、もろとも下へ落下した。

「まったく・・・新伊君！邪魔をしないでください！」

「ああ？わりい、三浦」

デルタは、屋上から降りてきたサソードを一喝する。

「もう疲れた・・・今日は帰るぞ、三浦」

「はぁ・・・本当に勝手な人ですね、あなたは・・・」

デルタは、少しうつむき加減でそう言った。

「そういうことだ、じゃあな」

{R i d e r S l a s h }

サソードは、紫色の光子で満たされたヤイバーを思いっきり地面に打ち立てた。

それにより地面はひび割れ、爆発が起きた。

黒炎がはれたとき、既に2人は居なかった。

「最後に言っておきます。

あなた達は、我ら『Black K h a o s』に飲み込まれる運命ですよ・・・」

「はぁ！？なんのことだ！応えろ！」

誠斗の声が届くことは無かった。

突然の襲来で、残ったのは壊れた倉庫内と傷ついた草名護だけだった・・・。

第十二話 黒き混沌（後書き）

なんか中途半端に終わってしまいましたが、一応したかったことは出来ました。

新ライダー登場に謎の組織登場。
いい響きです。

前記したとおり、本格的に始まる（予定。本当に予定）のでライダー好きの人もやっと楽しめるかもしれません。

とりあえず、次回。

第十三話 緑の圧碎（前書き）

えー、新ライダー登場です。

ただ、物語としては微妙な感じになってしまいました。

このライダーは何かを想像して、補ってください・・・。

それではどうぞ。

第十三話 緑の圧碎

「なんだ、あいつらは!!」

体のあちこちに、ガーゼやら包帯やらを付けまくっている草名護の文句が飛ぶ。

先ほどの戦闘でサソードに攻撃の連打を喰らい、一番ダメージを負ったのが草名護なので余計に苛立っているのだろう。

「最後に『Black KhaoS』・・・とか言っていましたね」
「ぶらっくかおす？」

威伊塚があごに手をあて何かを考え始める。

「でも、どうにせよあいつらは敵ですよ？襲ってきたし」
「そう・・・なのか「次会ったら絶対殺す・・・殺す・・・」」

Black KhaoSなる奴らに関して議論している最中に、草名護が私怨の言葉を口にしてソファアから立ち上がる。
そのまま荷物を背負ってアジトから出て行ってしまった。

「・・・相当怒ってますね、あいつ」
「うん・・・」

それを最後に議論は終了し、3人もまた別れを告げて帰宅した。

RIDER、Sアジトから場所は離れ、薄暗い照明に照らされる謎

の場所。

奥には少し大きめの椅子があり、一人の男性が座っていた。

その手前で、先ほど誠斗達と戦っていた三浦と呼ばれた男が椅子に座っている男と会話をしている。

「・・・で、任務は失敗だったのです？」

「すいません、マスター。でも一人、重傷を負わせることに成功しました」

「・・・わかりました。今回はそれで許しましょう」

「はい、ありがとうございます」

会話を終えた三浦はくるっと半回転し、その場を離れた。

「・・・はあ、まだなにも好転しませんね・・・」

椅子に座っている男は、頭を抱えた。

（翌日）

「なあ誠斗、草名護が怪我してるんだけど。なにかあった？俺のいないうちに」

「うん、まあいろいろと・・・てか、なんでお前が草名護のこと心配してんの？」

学校の昼休み、2人は机をあわせて弁当を食していた。

「なんか、草名護がライダーってこと知ったから会いにいったんだよ」

「・・・それで？」

「雰囲気が入られた」

「はあ!？」

誠斗は、自分があれほど喧嘩をした草名護と一発で仲良くなったサイトに驚き、大声を出した。

クラスメイトの視線が、全て誠斗に集中した。

「（前もこんなことあったな・・・）」

と思いつつ、誠斗は空になった弁当箱を袋に戻した。
瞬間だった。

「うわああああ!!」

外からの男子の叫び声が、教室に響き渡る。

慣れない声に、クラス内の生徒は一斉にざわめき始める。

「・・・誠斗」

「ああ、耳障りな音も聞こえ始めた」

誠斗は勢いよく立ち上がり、教室を飛び出た。

誠斗が気配を追って行き着いた場所は、体育館裏。

ここは人気が少なく、教室からも遠いので男子生徒が襲われたのは別の場所だろう。

「変身!!」

誠斗はバックルにデッキを挿入、龍騎に変身した。

「なんだ、ライダーか? いいだろう、返り討ちにしてやる!」

相手は人間と同等の知能と姿を持つステンドグラスのような怪人・ファンガイアである。

両者は一斉に走り出し、互いに攻撃を炸裂させあう。

そして、誠斗がとどめをさそうとカードを引き抜いた瞬間・・・!

「ドゴオオオオン!!」

「!?!」

突如としてファンガイアが凍りついた。

次の瞬間には誰かがそれを蹴り飛ばし、粉碎した。

「な、なんだ・・・?」

吹き飛んだファンガイアの破片が全て消え、飛び込んできた謎の人物が姿を現す・・・。

「死ね」

龍騎のマスクの半分が消し飛んだ。

それに気づいたときには既にはるか後方へ、龍騎は吹き飛んでいた。

「グアアッ・・・」

腹を押さえ、龍騎はうめき声をあげる。

「弱いな・・・お前程度のやつを、三浦達は殺せなかったのか」

龍騎が視線の前方に戻した。

そこには緑を基調としたアーマー、それに杖を持つライダーがいた。

「これで、終わりだ」

〜SCREW RUSH SCREW RUSH〜

そのライダーは2枚のカードを杖にスラッシュさせた。
電子音とともにそのライダーは杖を構える。

「スクリューラッシュ」

第十三話 緑の圧碎（後書き）

このライダー、異常な強さです。

けど、テレビで初登場の時はコレくらいだったはず。

徐々にノーマル化していっただけだ。多分。

それでは、誠斗の心配をしながら次回へ。

第十四話 大奮闘（前書き）

えー・・・。

更新が大変遅くなってしまいました。

なんかパソコンが不調で・・・。

でも、もうすぐテスト勉強で1週間更新できない・・・。

どうしよう、俺。

てな感じでどうぞ。

第十四話 大奮闘

「させるか！」

{EXCEED CHARGE}

刀身を紅く光らしたファイズエッジが、謎のライダーの技を相殺した。

そのライダーはエッジをよけた後、龍騎へ向けて再び杖を構えた。

『ガギイツー!!』

「・・・ちっ」

イクサのカリバーから放たれた弾丸が、そのライダーの手甲に直撃する。

その衝撃で、そのライダーは杖を落とす。

{ADVENT}

すかさず龍騎は残った力を振り絞り、ドラグバイザーへカードを――ベントイン（読み込み）した。

それにより出現したドラグレッダーが、丸腰のライダーを狙う。

「めんどくさい事になったな・・・」

謎のライダーはドラグレッダーの攻撃を余裕をかもし出しつつ避け、カードを何枚か投げた。

{REMOTE}

投げた物とは別のカードを、落ちている杖にスラッシュする。
電子音とともに、スラッシュしたカードから紫色の閃光が宙を待っているカードに飛ぶ。

閃光が当たったカードには何が起こったかというところ・・・。

「アンデッドが出てきた!?!」

そう、カードに封印されていた怪人・アンデッド達が一齐に飛び出してきたのだ。

アンデッド達は各々の意思で動き回っている。
だが、イクサはその場を動かずに、ゆっくりとフェッスルをバックルに挿入していた。

「俺の・・・邪魔をするな!?!」

突然の咆哮から、先ほどとは全く違う素早い動きでカリバーを振り回し始めた。

その刃に捕らえられえたアンデッドは、有無をいわずカード戻った・・・。

「おお、容赦ない攻撃・・・」

「気を抜くな!」

「!?!」

イクサの怒涛の攻撃に呆然としていたファイズに、謎のライダーが杖を構えて飛び掛った。

間一髪避けられた攻撃は、ファイズの後ろにある木に直撃した。

その木は、まるで電動ノコギリで切ったかのような切り痕を残して

倒れた。

「杖なのに鋭さは一人前かよ・・・！」

EXCEED CHARGE

ファイズもエッジで応戦した後、ミッションメモリーをポインターに差し替えて右足に装着する。

流れ作業でフォンのボタンを押し、チャージも完了させる。

「たぁ！」

高く飛び上がり、一回転した後にファイズは両足を前に突き出した。同時にポインターからは、円錐状の紅い光のポイントが放たれる。それは謎のライダーを的確に捕らえた。

「くっ・・・らえ!!」

ファイズが思い切り右足を伸ばすと、瞬間的に紅い光に吸い込まれた。

円錐状のポイントは、高速回転を始める。

しかし・・・。

「この程度で、俺を倒す気か？」

「なっ!？」

謎のライダーが、両手で握った杖を大きく振ると、ポイントは消滅し、ファイズは吹き飛ばされた。

「はぁぁ！」

全てのアンデッドをカードへ戻したイクサが、謎のライダーに斬りかかる。
だがそれも空振りに終わり、謎のライダーの反撃がイクサを傷つける。

「草名護・・・どいてろお！」

マスクは割れていて、装甲もボロボロの龍騎が渾身の力で走りこむ。そして、飛来したドラグレッダーと共に上空へ飛ぶ。
ドラグレッダーの炎を受け、龍騎はドラゴンライダーキックを放った。

「ぐ・・・おおおおお！」

謎のライダーは杖でその攻撃を防御するが、威力の高いその攻撃を防ぎきれず、後ろへと弾かれた。

「くそ・・・。これしかダメージを、与え・・・られない・・・のか・・・。」

ダメージを負っている体にファイナルベントの負荷が合わさって、龍騎は地面に倒れこんだ。

それを飛び越えて、『ファイズショット』を構えたファイズが右手を突き出す。

「無駄だ」

ファイズは右手を謎のライダーの左手に払われ、杖の一撃で地面に倒れた。

「これで終わり」「やらせるか！」

謎のライダーが振り上げた杖に、イクサのカリバーの弾がヒットする。

だがそれは、杖をいったん下に下ろさせる作業にしかならなかった。

「面倒くさいことを――」

・・・何だと!？」

謎のライダーは、再び振り上げた杖を見て驚愕する。

何と、杖が真つ二つに割れていたのだ。

そう、3人が杖に蓄積させたダメージにより、とうとう杖が割れてしまったのだ。

「ざまあみやがれ・・・おりゃあ!!！」

「なっ・・・グアア!!！」

イクサは「ブロウクン・ファング」を放ち、防御するすべが無い謎のライダーを吹き飛ばした！

第十四話 大奮闘（後書き）

とうとうダメージを負わせたぜ！

強すぎて、書いてる途中はどうやって倒そうか困ってたんだぜ！

・・・はい。

前書きどおり、テスト勉強でまたまた更新が遅れる感じです。
スイマセン。

でも、テスト終わったら速攻で書くんて許してください！
それでは。

第十五話 病院プロブレム（前書き）

私は戻ってきた。

はるか昔（約1ヶ月前）、私は封印された（パソコン禁止期間）。数々の苦しい仕打ち（ただの勉強）を乗り越え、ついに解放された！（パソコン使用が許可）。

だがなんだ！

いざ解放されてみると、世界は混沌に満ちていないか！（納得いく文章がかけない）

これも全てはあいつのせい・・・、

おのれ、ディケイドオオオオー！！！！！！

第15話、どうぞ。

第十五話 病院プロブレム

吹き飛ばされた謎のライダーはすぐさま起き上がり、3人と距離を置く。

その硬直がしばらく続いた後、謎のライダーが動いた。

「・・・チツ」

小さくしたうちをした後、折れた杖にカードを2枚スラッシュさせた。

{ABSORB}

{SMOG}

直後、謎のライダーを中心として煙幕が発生、姿が見えなくなる。

「待て！」

イクサがカリバーを振り回して煙幕が消えたとき、既に謎のライダーはいなくなっていた・・・。

〵翌日 RIDER、Sアジト〵

この日、誠斗は休んでいた。

理由は入院である。

日々の戦いによるダメージが、昨日の戦いで一気に出てきたのである・・・。

といっても、ほんの3日程程度の短い期間であるが。

「サイト、それなんだ？」

「ん、ちよつとね」

草名護のいった「それ」とは、サイトが持っているノートのことである。

ソファアで、サイトがなにかのノートを見ている。

「ちよつとって・・・ん？」

興味を持った草名護がノートを除くと、そこにはモンスターの全体図・名称・特徴など、様々な情報がビッシリと書いてあった。

「お前、なんだこれ!？」

「えっと・・・、咲塚さんとか威伊塚さんから聞いたり自分で直接見た戦闘を元に、モンスターの情報をまとめてみたんだ。俺、役に立つことが無いから少しでも役に立ちたくて・・・」

照れながら説明するサイトの背後から、突然咲塚が現れた。

「ねえ、誠斗のお見舞いに行かない？」

ニコニコとして提案する咲塚。

だがしかし、この提案が、後で大変な自体を引き起こすとは・・・
誰も気がつかなかった・・・。

くとある病院

「ここだね」

「そうだな」

「国立渋谷病院」と大きく象られた看板が門の横に設置されている大きな病院。

誠斗が入院している病院である。

その304号室。

標識には「世翠 誠斗」と書かれている。

「失礼します・・・」

少し遠慮がちに4人が入ると、そこには一人の女性がおり、椅子に座ってリンゴを剥いていた。

「あら、かいちゃんのお友達？ こんにちはわ」

「あ、こんにちはわ」

その女性は、剥いたりんごを乗せた皿をテーブルの上に置き、そそくさと病室を出て行った。

「・・・誠斗、あれだれ？」

「俺の姉さん。ああやって、ちよくちよくお見舞いに来てくれる」

「へえ・・・」

そのときである。

「キューーーーーン！！」

「!!」

突然、誠斗が耳を押さえて苦い表情をする。

「モンスターか!？」

「はい、場所は――」

「「変身!!」」

「COMPLETE」

「フィ・ス・ト・オ・ン」

3人が同時に変身し、戦闘態勢を取る。
敵は・・・、

「なんだ、こいつら!？」

咲塚も絶賛、トリックベントも真っ青な、大量のモンスター。

「とりあえずやるしかねえだろ!」

早々とカリバーを構え、モンスターの群を斬り付けて行く草名護。
その後を追うように、ファイズと威吹鬼も遅れて戦闘を開始した。

第十五話 病院プロブレム（後書き）

前回からえらく間を空けてしまい、まことに申し訳ありませんでした。

今回から、また週1のペースで更新を続けるようがんばりますので、応援のほうをよろしくお願いいたします。

まるで人気小説のコメントみたいだけど、そこはハイパークロックアップでスルーだ！

第十六話 姉さん（前書き）

・・・駄目だ。

話の筋が立てれない・・・。

ここらへんのストーリーだけなぜか浮かばない・・・。
小説書いている身としてはやっていけない・・・。

詳細はあとがきで。

第十六話、どうぞ。

第十六話 姉さん

「はああああっ!!」

「よし・・・っああああ!!」

威吹鬼が疾風一閃を放ち、多数の怪人を撃破する。

それに便乗し、ファイズも連続で『スパークル・カット』を決めていく。

「これで・・・終わりだ!!」

イクサが「イクサ・ジャッジメント」で最後の一体を斬り倒し、ようやく戦闘が終了した。

「・・・今度は俺たちが入院するかも・・・」

「そうですね・・・」

「・・・」

3人は流れ出る汗を拭きながら、地面に尻餅をついた。

（304号室）

「なあ、サイト」

「何？ 誠斗」

「お前は何故こういうことをする？」

「だってさあ・・・」

サイトがため息をつきながら、空になった皿へ切ったりんごを置く。誠斗が何を疑問に思ったか、その光景を見た者はすぐに分かるであろう。

長いロープで、誠斗がベットに（布団ごと）縛り付けられているのである。

「これをほどけ。あかつきにはお前をフルボッコのしてやるからよ」
「絶対、嫌だよ」

サイトが逃げるようにして、例のノートを見始める。

「・・・ってそれ、間違っていないか？」

「え？」

そのノートを見た誠斗が、間違いを指摘する。

「その怪人の特性はそうじゃなくってこうだろ」

細かな部分のミスを指摘され、サイトは急いで訂正した。

「ここ間違ってたか・・・、ありがとう誠斗」

「いやいや、それほどでもなくもなくm」それより誠斗、ちょっと聞きたいんだけど」・・・どした？」

「いやさ、咲塚さんも威伊塚さんも誠斗も、何で会ってもいない怪人の情報を知っているの？」

「うーん・・・俺の場合だけかもしれないけど・・・」

一番始めにに变身したとき、俺は浮かんでいる龍騎のデッキに触

れた。

その瞬間、視界が真っ白になって強制的に謎の『記憶』^{データ}が頭の中に流れ込んできた。

最初は仮面ライダーと怪人の存在、龍騎への変身方法だけがハッキリと分かった。

それから時間が経つごとに、だんだんと様々なことが分かっていた。

現時点では・・・まあ、8割ぐらいは認識できているんだろうな。

これが、俺の情報源の全てだ」

「ほお・・・」

サイトは誠斗の話に感心しつつ、りんごを食べて今の話を全てメモしてまとめている。

「・・・器用なこと

するな、お前」

「キャーッ！ッ！」

「！！！」

突如として響き渡る女性の叫び声。

この声の主は・・・

「・・・姉さん！」

「あ、誠斗！」

誠斗は布団を器用にすり抜け、デッキを持って急いで病室を出た。

「フフッ、こいつが・・・」

「あ・・・あ・・・」

成虫体ワームが、後ずさり誠斗の姉、『世翠^{よすいえり} 恵理』に近づく。
そして、ワームが腕を振り上げ瞬間。

「させるかあ！」

まだ変身もしておらず、巻いていたはずの包帯がだらしなく垂れ下がっている誠斗が全力の助走から渾身の突進をワームに当てる。
不意の出来事にワームもふんばりがきかず、両者共に地面に倒れこんだ。

「クッ、貴様あ・・・！」

すぐさまワームは立ち上がって誠斗の服の襟を掴み、壁に投げ飛ばす。

だが誠斗は中を舞っている間にベルトを召喚し、逆に壁を蹴ってワームのほうへ飛び込みながら変身する。

お返しだと言わんばかりに勢いのついた龍騎の拳が、ワームの頬に直撃する。

もちろん先ほどの突進とはわけが違い、威力のある拳はワームを遥か後ろの壁に激突させた。

「全快じゃなくてもお前程度なら余裕だぜ・・・！」

〔SWORD VENT〕

「ドラグセイバー」をゆっくりと構えた龍騎は、猛ダッシュしてワームを斬りにかかった。

第十六話 姉さん（後書き）

・・・机に突っ伏しながらこの記事を書いています。
鬱です。

前記のとおり、何故かストーリーが思いつきません。
だから、全部行き当たりばったりです。
いつもより2割程度量が少ないでしょ？

・・・こんな感じの今日この頃。
きつとこれを切り抜けたらすっかりとした感じになると思うので、
なにとぞお願いします。
てか、スイマセン。

第十七話 にぎやかに（前書き）

上手く話をまとめるのに苦労した。

無駄にいろいろしすぎて、話の収集がつかなくなりかけた。
あぶない。

これが今回、自分の感想です。

そんな滅茶苦茶な第十七話、どうぞ。

第十七話 にぎやかに

「はぁ！」

力強く振り下ろされたセイバーが、ワームの体を斬りつける。
立て続けに、龍騎の蹴りがワームの腹に入る。

「グ・・・なめるなよ!!！」

「クッ・・・！」

ワームは龍騎の攻撃を防ぐと、続けざまに攻撃を浴びせる。
耐え切れなくなった龍騎は、一旦後退し新たなカードをデッキから引き抜いた。

〔ADVENT〕

その電子音と同時に、上空から窓ガラスを突き破って「ドラグレッダー」が飛来する。

ドラグレッダーは、龍騎の周りをグルグルと回りワームを遠ざけた後、尻尾であるセイバーでワームを斬り飛ばす。

「よし、このまま締めと行くぜ」

〔FINAL VENT〕

龍騎が、両腕を前に突き出して腰を落としながら右へ払う。

「たぁぁぁぁ!!！」

龍騎の必殺キックである「ドラゴンライダーキック」がワームの体

に炸裂する。

ワームは燃えながら外へ吹き飛ばされ、上空で爆発した。

「フッ、きまっただぜ……。……。……。……。あ」

変身を解除し、少しカッつけてポーズを決めた誠斗は、一つだけ忘れていたことを思い出す。

「（……。姉さんの目の前に変身しちゃったぜ☆）」

ポーズを決めた青空をじつくりと眺め、滝汗のまま誠斗はゆっくりと振り向く。

しかし、その汗は一瞬で引くことになった。

「姉さん!!」

誠斗はすぐに駆け出し、恵理に近寄る。

それもそのはず、恵理が意識を失い地面にグッタリと倒れこんでいた。

「誠斗ー?」

そこへ、怪人がいなくなったのを見計らって病室を出てきたサイトがやってくる。

「あ、サイト! 姉さんが……。」

「ん? あ、誠斗のお姉さん! ……。って、気絶してるだけじゃない」

「え？」

誠斗は冷静に恵理を見る。

サイトの言うとおり、確かに気絶しているだけだった。

「・・・・・・・・」

〽誠斗家〽

咲塚・威伊塚・草名護と合流し、一行は病院から一番近い誠斗の家へとお邪魔した。

「ふう、大変だったあゝ」

咲塚がソファーに寝転がり、オレンジジュースを飲みながらため息をつく。

「確かに、アレは疲れましたね」

「絶対、病院に何かあるだろ」

威伊塚も静かにため息をつき、草名護はコーラを一気に飲み干した。

「病院に靈的な何かがあるんじゃないや・・・うぷっ!!」

草名護が急に口を押さえて、トイレへ駆け込む。

サイトは不安そうに話し始める。

「草名護、どうしたんだろう？まさか、戦闘のダメージが・・・」

「いや、あれはどう見ても『ゲップ』だろ・・・」

「『ゲップ』ですね」

「コーラ一気飲みなんてするから・・・ああ」

「・・・そうっすね」

3人の推測はどうやら当たりのようで、トイレからは変な声が出て、家中に響き渡った。

「・・・んゝ・・・」

「あ、起きた？姉さん」

そこに、咲塚と同じく（枕、布団がかぶっているなどの差異はあるが）ソファで眠っていた恵理が目覚めます。

「・・・ああ、気分が悪い」

同時に、草名護がトイレから出てくる。

「お？先程、きれいな響きを家中にもたらした草名護君ではないか？」

咲塚が草名護を茶化す。（この時、草名護は咲塚目掛けてクッションを全力投球したがよけられ、流れ弾としてサイトの顔面にヒットしたのは秘密だ。）

威伊塚がこらこらと草名護を咲塚をしかると、咲塚はおとなしくソファに座った。

「・・・なあ、姉さん。姉さんはいつ意識を失ったの？」

「え？そうねえ・・・」

誠斗は何気に緊張していた。

心配性の姉さんにこんなこと知られたら、どうなることか・・・と。

「——かいちゃんが突然、喧嘩を始めたところだったかしら？」
「・・・は？」

どうやら、恵理はあまりにショッキングな出来事だったため、記憶が曖昧になって改ざんされてしまったらしい。

咲塚は、その変えられた記憶の内容に大爆笑した。

ついでに、誠斗は恵理に説教もされた。

不安も消し飛び、散々な出来事で今日は終わりを告げた。

「・・・それより誠斗、病院に戻らなくていいの？まだ入院していることなわけだし」

「・・・あ」

夕方

夕日が射す時間、サイト達4人が、誠斗の家から帰っていった。

「まったく、あの後咲塚がゲームを始めて、ゲーム大会になったあげく、ちゃっかり夕食まで喰っていきやがって・・・」

「まあ、いいじゃない。にぎやかなことはいいいことよ？」

「はあ・・・」

誠斗はため息をついた後、少し笑顔で自分の部屋に戻った。

「・・・今は、にぎやかで・・・。今は・・・」

第十七話 にぎやかに（後書き）

第一部 完

・・・的なテロップが流れそうな感じで終了した今回。
次回からは構想を練っていたストーリーに軌道修正。
これで、やっと困らずに執筆が可能に。ヨッシャー。

ということで、次回からは本格的にストーリーが展開！（するかも
しれない）

お楽しみに！！（しても特には無し）

番外話1 夢の中の戦士(前書き)

これは夢。

そう、夢なんだ・・・。

まあ、あれです。

疲れたんです。

ストーリー考えると頭が痛いんです。

だから、今回は超アドリブで即興です。

どこどこ書いていったから量は5割増しです。

今回はお遊び回ということでしょうか・・・。

※警告※

以下、意味わかんないことになります。

理解不能になった時点で戻ることを推奨します。

そうになったら、次回に期待を抱いて、このところは忘れてください。
では番外話、どうぞ。

番外話1 夢の中の戦士

「変身！」

どうも、誠斗です。

いつものように怪人を倒すべく、戦っています。

え？何で急にお前がナレーションしているかって？

そんなの気にしない、気にしない。

おや？そうこうしているうちに、咲塚さんが加勢に来てくれました。
これは心強い。

咲塚さん、一緒にがんばりま——

「死ねえ！」

ん？え？は？

咲塚さん、突然ファイズエッジを俺目掛けて振り下ろすのはやめて
ください。

冗談でしょ？

・・・違うみたいですネ。

「「変身！」」

おお、威伊塚さんと草名護が助けに来てく「「覚悟オオ！」」

・・・だめだこりゃ。

ちよつと3人とも、本気で危ないですって。

ちよつと、ちよつ・・・。

EXCEED CHARGE

イ・ク・サ・カ・リ・バ・ー・ラ・イ・ズ・アツ・プ

それは、必殺技ではありませんか？

怪人はあっち。

俺を狙うのは間違っていますよ。

・・・本気？

やばい、本気で走ってきた。

まずい、やられる。

逃げなくちゃ殺される！

う・・・うわあああ！！

「うわあああああああ！！！！」

誠斗は勢いよく起き上がるとベットから滑り落ちた。

「・・・・・・・・・・・・・・・・夢か」

単純な夢落ちである。

「（やけにリアルな夢だった・・・汗もかいてるし）」

落ち着いて部屋を出て、リビングに行く。

しかし、そこにあった光景は、普通では考えられないであった。

「あ、かいちゃん」

優しくあいさつをする・・・ファンガイア？

「あ・・・？・・・あ、へ、変身！」

しばらく呆然とした後、誠斗は急いで変身し、拳を突き立てる。
だがその拳はあっさり受け止められ、流されてしまった。

「かいちゃん、暴力はいけません！」

「・・・・・・・・かいちゃん？」

誠斗は急いで家を出た。

そこで見たものは・・・

「なんじゃこりやあああ！！！！」

人間とグロンギが腕を組み、仲良く歩いている光景。

赤ちゃんの乗ったベビーカーを押すオルフェノク。

家を建設している人間、そしてミラーモンスターと魔化魍。

鬼ごっこして遊んでいる子供とワーム。

どれも信じがたい光景である。

「・・・そ、そうだ！サイトの家に・・・」

そう考え、着いたサイトの家では、サイトがアンデッドとテレビゲームをしていた。

誠斗は思う。
もう駄目だ、と。

後に威伊塚宅、草名護宅を訪ねる誠斗であったが、どちらも同上の
光景であった。

「・・・こうなったら・・・」

俺が全てを破壊するしかない!!」

誠斗がそう決意した瞬間、龍騎のデッキが宙に浮いた。
デッキは徐々に形を変え、白く変化した。
9つのマークが象られしそれは・・・

「・・・ディケイド?」

そう、ディケイド変身ツール『ディケイドライバー』であった。

「そうか、これで・・・よし」

誠斗はドライバーを手に取り、腰に装着、左右に引いて展開する。
同時に現れた『』からカードを一枚取り出し、静かにつぶやく。

「・・・変身・・・!」

〔K A M E N R A I D D E K E D 〕

10つの分身がアーマーを造り、バックルから飛び出した　が体に色をもたらず。

「あれは、ディケイド！」

「世界の破壊者め、覚悟！！」

どこからかキバと響鬼が現れ、ディケイド目掛けて問答無用とばかりに攻撃を放つ。

「俺は・・・全てを破壊する！！」

〔アタックライド　スラッシュ〕

2人の攻撃を避けて、ディケイドがカウンターを繰り出す。

幾つにも分身し、追い討ちをかける剣の太刀筋は、2人のライダーを一瞬にして撃破した。

「・・・やるのか・・・」

ディケイドがあたりを見回したとき、既に大量のライダーが集まっております、その中にはファイズ・威吹鬼・イクサも入っていた。数は、ざっとみて20人はいるであろう。

「はあああああああ！！！！」

ディケイドが大きく剣を振り上げる。

瞬間。

『ベキイツ!!』

「・・・・・・・・・?・・・・・・・・・折れたああ!?!」

そう、ものの見事に真っ二つである。

先ほどの攻防で既にひびが入っており、今の衝撃で粉碎したのである。

「も、もろいわ!こんなの武器じゃねえ!!」

剣を地面に叩きつける。

・・・・と、その切っ先はバツクルを切り裂き・・・・。

「・・・・変身がとけたああああああ!?!」

不運なことに、バツクルも真っ二つに割れ、変身は解除された。

というか、もう変身不可能である。

「ディケイド・・・・覚悟オオ!!!!」

「え、ちょ、あの、何というか、今まで調子乗ってたというか・・・・ふざけててすみませんでした。まさか生身の人間にそれは・・・・ちょ、本気?嘘だ、やばい、助けて!」

まさにこれは、夢で見た結末である・・・・。

「無理やり、本編ぽくするんじゃない?!」

EXCEED CHARGE

イ・ク・サ・カ・リ・バ・ー・ラ・イ・ズ・アツ・プ

「う・・・うわあああああああ!!」

窓からは木漏れ日が差し、外からは小鳥のさえずりが聞こえる。
龍騎のカードデッキはそのまま、誠斗はまだ布団の中にいる。

「姉さん!!」

「あら、どうしたのかいちゃん?今日は日曜日なのに・・・。」

恵理もいつも通りである。
つまりこれは・・・。

「ゆめおち?」

誠斗は部屋に戻ると、再び布団にもぐりこんだ。

「よかった・・・みんないつもどおり。部屋にも怪人がいるし、俺はディケイドにもなっていない・・・」

・・・怪人?」

「グワァァァ!!」

その後、誠斗は応戦し勝利する。

龍騎は外に出て、大量の怪人が徘徊しているのを目撃した。

「・・・畜生、やるしかねえ!!」

セイバーを構え、怪人軍団へ果敢に突っ込む龍騎。
しかし・・・。

「そこまでだ!」

「!?!」

何と、威吹鬼が龍騎を撃ったのだ。

そう、よく見ると、怪人に混じってライダーも徘徊していた。

それ以前に、今の射撃で龍騎のデッキが破壊されていた。
変身解除である。

「ま・・・ま・・・またかあああああ!!!!」

どこからが夢なのか。
それは定かではなかった。
・
・
・
。

番外話1 夢の中の戦士（後書き）

完読、お疲れ様でした。

リアルな話をする、ストーリーの構成を組み合わせていくのに手間がかかっているんです。

おおまかなストーリーは決まっているので、そのつなぎを考えている途中です。

なので、今回は避難的な意味でこのような話を投稿しました。

決して、めんどくさくなった訳じゃナイヨ？

次回は近日中に投稿するので、どうか長い目で応援のほう、よろしくお願いします・・・。

第十八話 襲撃（前書き）

どうも、ガラガラです。

なんか気分で書き上げた第十八話です。
どうぞ。

第十八話 襲撃

「それでは」

「バイバイ」

「じゃあな」

誠斗宅を離れてしばらく、3人は別々の道に分かれた。
そのうちの一人、草名護は暗い路地裏を通って帰宅する……。

「よお」

「!!」

草名護の身体を真つ二つに引き裂く勢いの刀が、突然振り下ろされる。

間一髪それを避けた草名護は、「イクサナックル」の衝撃波で敵を突き放した。

「……お前は……」

「お喋りは別にいいんだよ。分かっただとととと変身しろ」

{H E N S H I N }

サソリ型変身ツール『サソードゼクター』が、「サソードヤイバー」にセットされる。

そして、男は「仮面ライダーサソード」に変身した。

「クッ、この戦闘狂が……変身!!」

「フィ・ス・ト・オ・ン」

負けじと、草名護もイクサに変身する。

再び、両者の剣が激しく打ち付けあうことになった。

「ハハッ、一人だとコレで終わりですか？」

「ハア・・・ハア・・・」

同時刻、駐車場。

ここでは、既に威吹鬼とデルタが戦闘を始めていた。
が、戦況は威吹鬼が劣勢である。

「ホラ、まだ終わっていませんよ！」

追い討ちをかけるように、デルタの弾幕が展開される。
威吹鬼は必死に打ち落とすが、カバーしきれず攻撃が直撃する。

「・・・音撃射・・・疾風一閃！」

残る体力を振り絞り、威吹鬼が必殺技を繰り出す。
広範囲に及ぶこの技により、デルタの光弾は全て打ち落とされた。
しかし・・・

「チェック！」

{EXCEED CHARGE}

仮面ライダーデルタの放つ光は、「疾風一閃」をかいくぐり威吹鬼に当たる。

三角錐状のロックオンが威吹鬼の自由を奪う。

「終わりです・・・はぁ!!」

デルタがロックオン目掛けて飛び蹴りを放つ。

一瞬にしてデルタは吸い込まれ、威吹鬼の身体を貫通する。

「ク・・・ソ・・・」

「烈風」を地面に落とし、△のマークと共に威吹鬼は地に伏せた。

「たぁぁ!!」

「!?!」

優越感に浸っていたデルタの後ろに、「ファイズショット」を構えたファイズが飛び掛る。

チャージされていたショットは必殺級の威力を持っていたため、それを喰らったデルタは吹き飛び、柱に激突する。

「・・・少し浅いかな」

「まったく・・・油断できないですね・・・」

ファイズの攻撃を直前で察知したデルタは、ギリギリのところで直撃を回避したのである。

「第2戦ですか・・・」

「これで終わりだよ・・・！」

『READY』

ファイズはメモリーを、近くに止めてあった『オートバジン』のグリップに指し直し、「ファイズエッジ」を構える。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

2人のライダーに、緊張が走る。
だが、その均衡は一瞬のうちに破られる。

『バゴオオオオオオオン！！！！』

「「！？」」

2人からそう遠くない場所で、爆発が起こった。
そして、爆煙をまとって現れたのは・・・。

「草名護！」

「新伊君！」

先ほど戦闘を開始したイクサとサソードである。

2人は戦闘をしている過程で移動し、ファイズとデルタの元まで来てしまった。

これで戦闘は2対2。

大乱戦は必須である。

「面白じゃねえか。やろうぜ」

「戦闘狂はコレだから困るぜ・・・」

「まとめて叩くチャンスですね・・・」

「草名護、さっさとケリをつけよう！」

4人は再び戦闘体制をとる。

「そこまです」

突如、どこからか声が響き渡り、戦闘を中止させる。

「マスター・・・もう終わりですか？」

「・・・チッ！」

新伊は早々に変身を解き、その場を立ち去ろうとする。

「ちょ・・・待っ——「邪魔です」

立ち去る新伊を追いかけようとするファイズを、デルタが阻止する。
次の瞬間には、眩い光に包まれて2人とも消え去っていた。

「・・・なんだったんだ、あいつらは・・・。なあ、草名・・・護
！？」

振り返ったファイズが見たのは、変身が解け、地面に倒れている草名護だった。

第十八話 襲撃（後書き）

ハイ。

完読お疲れ様でした。

次回もがんばるんでお願いします。

第十九話 悪天候（前書き）

えー、今回は決戦の前の小休止のような感じで、全体的に暗めなイメージです。

ドス黒い雲がかかり、雨が降っているような感じです。
そう思って読んで頂ければ、イメージが掴みやすいかと・・・。

それでは第十九話、どうぞ。

第十九話 悪天候

「草名護!?!」

倒れている草名護を目の前にして、咲塚は動揺を隠せていなかった。

謎の光により、敵は姿を消した。

草名護が戦闘により重症を負っていた様子も無かった。
だとしたら、草名護が倒れる原因は無いはずである。

「……心配するな……。なんでもない……」

「!! 本当に大丈夫?」

気がつくのと、草名護は一人で立ち上がっていた。

だが、息は荒く、足元はおぼつかず、声は蚊の鳴き声のように小さかった。

「俺はいいから……。威伊塚を……」

「え? 威伊塚って……。って、草名護!?!」

そこまで言っつて、草名護は再び地面に倒れこんだ。

咲塚が落ち着いて辺りを見回すと、デルタに敗北し、倒れている威伊塚はすぐに発見された。

「まじで……。? コレ、やばくない……。?」

咲塚は急いで誠斗・サイトに電話をして、救急車を呼んだ。

（数日後・草名護の病室）

「・・・クソッ！あいつらにやられっぱなしじゃねえか！！」

ドンッ、と草名護がテーブルを勢いよく叩く。

「しかたないよ。今回は突然のことだったし・・・」

「今まで突然じゃなかったことなんてあるか！？」

「う・・・」

咲塚が口を閉ざす。

「威伊塚はまだ意識がもどらねえし、誠斗は全快じゃねえし・・・畜生」

「・・・もっと早く気づいていれば・・・」

草名護が、布団をかぶって眠りにつく。

咲塚は頭を抱え込み、悩み始めた。

「咲塚さんが悪いんじゃないですよ・・・。今は一旦帰りましょう」

誠斗の提案で、各自帰宅することになった。

「でもさ、本当にこのままじゃまずい気がする・・・。何か、大きな闇に飲み込まれていく感じがする・・・」

「本格的に・・・戦わなくちゃいけないのか・・・」

帰り道、誠斗とサイトが会話を交わす。

しかし、とても高校生が交わすような明るい雰囲気とは思えないほどの暗く、静かな会話である。

「とりあえず、眼前の敵の、2人だけでも倒さねえと・・・、2対4でも勝てやしねえのに・・・」

「でも、襲撃されて迎え撃ちきれない・・・っていうのが今までのパターンだよ」

「こっちから仕掛けられれば・・・あるいは――」

誠斗の言葉を遮り、モンスターが出現する。

灰色の身体を持つモンスター「オルフェノク」である。

「おまえらかあ・・・今、同族達を次々に倒しているライダーは・・・」

「お前・・・タイミングが悪いんだよ!!」

龍騎に変身すると、瞬間的に「ドラグセイバー」を呼び出してオルフェノクの身体を斬り付けていく。

その怒涛の攻撃は、ある意味負の感情を放出するような感じである。

FINAL VENT

「たあああああああ!!」

既に限界であるオルフェノクに、止めの一撃が放たれる。

その攻撃が直撃したが最後、燃えながら吹っ飛び、最後には爆発した。

「はああ・・・」

変身を解除し、深い溜息をつく誠斗。

だが次の瞬間、溜息は止まり、脳は既に別の考えで埋まった。

「・・・あいつら、やっぱり・・・」

「・・・障害にはならないでしょう・・・」

フードを羽織った2人組みが、こちらを観察していた。

片一方は不明だが、もう一方は、絶対忘れられない人物である。

「・・・デルタ・・・!!」

誠斗はすぐさま走り出し、2人を追いかけ始めた。

サイトは用件が分からず、その場に残されてしまったが・・・。

第十九話 悪天候（後書き）

次回もまだ戦闘はする予定ではありません。

あくまでも今回は小休止、まだ始まっています。

本題は次回から。

ついに本格戦闘小説なるか・・・！？

まあ、次回をお楽しみに。

しといてね？

第二十話 誘拐・サイト（前書き）

「シンプル・イズ・ベスト」。

友達から教えてもらった言葉です。

なんか、いい響きの言葉ですね。

何故こんなことを書くかって？

そんなの、書くこと&ネタが無いからに決まってる。

第21話、どうぞ。

第二十話 誘拐・サイト

フードの2人は誠斗の追跡に気づくと、突然走り出した。

誠斗はそれをひたすら追いかけていく。

そして、先ほどまで住宅街の一角にだった場面は、ビルの裏路地へと変わっていた。

「ハア・・・ハア・・・」

「・・・あきらめないわね、あいつ・・・」

「・・・もう振り切りましょう・・・」

デルタの男は、スッと銀色の筒のようなものを取り出し、地面に投げつける。

銀色の筒は地面に触れた瞬間、外装がはじけ飛んで大量の煙が放出された。

「!! ゲホッ! ツガ!」

誠斗は不意に煙を吸い込んでしまい、激しく咳き込む。

あふれ出る涙を手で拭き、再び前を見たときは、既に2人の姿は無かった。

追跡は失敗に終わった。

「でも・・・!」

誠斗が2人を追い詰めた場所は2つの分かれ道があり、どちらも奥は行き止まりになっている。

そして、今誠斗がいる場所から奥にあるいずれかのビルは、2人が逃げ込んだビル・・・。

つまり、敵のアジトはすぐ近くにある。

翌日、誠斗はアジトでそのことを説明した。

草名護・威伊塚は入院し、アジトには3人しかいなかったが……。

「誠斗、それはホント？」

「ハイ、確かに……結局は振り切られましたけど……」

「いや、それだけでも吉報だよ！これで慎重に調査すれば、2人が退院したときにこっちから仕掛けられる！！」

咲塚が拳を握り締めて、熱論する。

誠斗もサイトも、それにつられて笑顔になる。

「よし……それじゃ、スグにでもそこら一帯のビル郡を見に行つて……」

咲塚が椅子から立ち上がり、テーブルに乗っている荷物をまとめ始めた。

だが、悪夢は突然やってくる。

{BURST MODE}

銀色の光弾が、テーブルを吹き飛ばす。

直前で気がついた咲塚は、直撃だけは避けたものの、手痛いダメージを負ってしまった。

「カハッ……！」

「やはり、作戦を立てていましたか……。やはり、自分の不始末は自分で付けなくては……。ハハッ」

突然現れたデルタは、廃倉庫の出入り口からゆっくりと歩み寄っていく。

「クソッ、奇襲しか出来ないのか？ お前らは！」

誠斗はポケットからデッキを取り出すと、前に構える。

それによりベルトが腰に巻かれると、右腕を左上に突き上げる。

「変身ッ！！」

ベルトにデッキが挿入されると、誠斗は龍騎へと変身を遂げる。

「おや、あの青鬼の二の舞になる気ですか？」

「うっせえ！」

{SWORD VENT GUARD VENT}

龍騎が2枚のカードをベントインすると、龍騎の両肩には「ドラグシールド」、右手には「ドラグセイバー」が装着された。

そこから間髪いれずに、龍騎は攻撃に移る。

だが、デルタは回避と攻撃の受け流しに徹し、龍騎との微妙な距離を保ち続ける。

「……。そこだ！」

そして、僅かな隙を突いて攻撃に転じる。

この緻密な戦い方に、威伊塚も翻弄されたのである。

「クッ・・・うらあああああ！」

先に痺れを切らした龍騎は、セイバーを大きく振りかぶり、デルタの懷に飛び込む・・・！
だが、

「隙が大きいですねえ？」

龍騎がセイバーを振り下ろす直前に、デルタは「デルタムーバー」を龍騎の腹に構え、恐ろしい速度で光弾を連射する。

「うつ・・・」

怒涛の攻撃に、龍騎は手に持つセイバーを離してしまう。

「チェック」

{EXCEED CHARGE}

無情にもデルタは必殺技発動の為に、エネルギーをムーバーにチャージする。

そして、龍騎の腹にロックオンが放たれ、自由が奪われる。
デルタは足を曲げ、空高く飛ぶ。

その足は、三角錐状のそれ目掛けて突き進み・・・！

「誠斗、危ない！！」

「え？俺！？」

サイトである。

デルタはサイトの服の襟を掴むと、そのままグイッと持ち上げ、腹に拳を入れる。

その一撃は、気絶するには十分は威力だった。

気絶したサイトを担ぎ、デルタはまた、廃倉庫の出入り口へと歩き出した。

「サイ・・・ト・・・！」

誠斗の、蚊の鳴く様に小さな声が、ひっそりと倉庫内にこだました。

第二十話 誘拐・サイト（後書き）

そういえば、最近は題名にも困っています。
一話一話が短いので、題名にも一苦労です。

今回の題名は、そんな憂鬱と精神的圧迫感から出来た題名です。

・・・酷いですね。

・・・ヤバイ、まじでネタが無い。

どうしよう、どうしよう。

まあいいや。

次回をお楽しみに。

第二十一話 混沌、決意へ（前書き）

最近、すごく眠たい。

四六時中どこでも眠くなる。

だから、小説の文を考えていると眠くなってかけなかったんです。

という、適当な言い訳。

第二十二話どうぞ。

第二十一話 混沌、決意へ

「・・・クソッ、クソッ！クソッ！！」

デルタが過ぎ去ってしばらく、地面を叩きながら誠斗は叫んでいた。相手は一人。

そう、たった一人にすら勝てないのである。

それで、敵組織を敵に回すなんて出来るはずもない話である。

頭で分かっている、心が納得しない。

その葛藤が、その叫び声には込められていた。

「・・・誠斗、ひとまず・・・落ち着こう・・・ね？」

「クソッ・・・」

フラフラと、危ない足取りで咲塚は誠斗に近づく。

だが、誠斗の気持ちは収まるところを知らない。

そのまま無言で、倉庫を走り去っていった。

（誠斗宅）

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

ベットに転がって、天井を見上げる。

頭は、もはや使い物にならない。

真っ白である。

眼の輝きは消え、影に侵食された誠斗の顔は、窓から射す夕日に照らされていた。

そのまま、ゆっくり、ゆっくりと時間は過ぎ去っていく。

そして、時計の針は、気がつくと10時を回っていた。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

誠斗の姉・恵理は、誠斗のそんな様子に気づいたのであろう、いっさいドアを叩いてはいない。

それに気づくと、少しだけ頭が働き始める。

だが、考えることは、さらわれたサイトのことと、ただただ虚しい・

——— 己の無力さだけである。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

ドツと出てきた疲れは、いつしか誠斗に眠気を与えた。

何も考えたくない誠斗は、それに甘んじて、深い眠りについた・・・。

（翌日）

「・・・コレは」

誠斗は、自分の携帯を持って固まっていた。
見ているのは一通のメール。

差出人は・・・

「三浦・・・涼太？」

差出人の名は『三浦 涼太』みうらりょうた。

文章から察すると、デルタの男のようだ。

その、送られてきた文章はこのようなものだった。

「拝啓 世翠 誠斗様

こんにちは、誠斗君。

先日はお騒がせいたしました。

そのときに誘拐した「神寺 サイト」は、私達の集会場になっ
ているとあるビルに監禁してあります。

といってもご安心を、別に飯を抜いたり拷問にかけたりしてい
る訳ではありません。

ただ、来客用の部屋でくつろいでもらっているだけです。これ
といって外傷はありません。

しかし、ここからが本題です。

私がこのメールを送った理由はただ一つ。

あなたにこのビルへ来ていただきたいのです。

場所は――――

（中略）

——分かってもらえたでしょうか？

別にお仲間を引き連れてもらっても構いません。

ただ、指定した日に来てもらいたいです。

来なくてもこちらから襲撃することもあります。

ただ、人質のお友達がどうなっても構いませんのなら……
ね？」

「……日時は、あさって、か……」

そう呟くと、誠斗はメニューを開き……

……メールを削除した。

そして静かに携帯を閉じ、鞆にしまった。

その後、何事も無かったように、誠斗は一日を過ごした。

そう、『何事も無かったように』……。

誠斗は咲塚にこのことを言わなかった。

つまり、それは一人で敵のアジトに乗り込むということ。

誠斗はそれを決意したのだ。

もう誰も巻き込まない。

もう誰も傷つかせない。

もう誰も犠牲にさせない。

「約束の日」

「・・・変身ッ・・・!!」

デッキをバックルに挿入する。

誠斗の身体に龍騎の体が張り付く。

そして、一回深呼吸をして・・・、

『ドオオオオオンッ!!!!』

ビルの扉を蹴飛ばした。

中は静かで、空気はひんやりとしている。

どこから来るか分からない敵に注意しながら、龍騎はデッキのカードに手をかける。

「「キシヤアアアア!!」」

「「グオオオオオオオ!!」」

数体の怪人が龍騎に飛び掛る。

だが、当の龍騎は慌てることなくカードをバイザーに「ベントイン」した。

{SWORD VENT}

「ドラグセイバー」がビルの窓を突き破り、龍騎の手に握られる。そしてそれを巧みに扱い、敵をなぎ払う。

「ちゅちゅと・・・サイトをだせ！」

第二十一話 混沌、決意へ（後書き）

やっとライダーライダーとした展開に引っ張ってこれた。

お母さん、やったよ。（誰だ

さあ、敵のアジトに侵入ですが、ぶっちゃけ話はまだまだ終わりません。

アジトで敵を倒して終了、な展開ではありませんので、そうそうに見切りをつけて閲覧終了は止めてください、そのダンナ（だから誰

第二十二話 ライオトルーパー（前書き）

ただいま、全国のディスプレイ越しにいるみな。
とくに人気があるわけでもないけど。

まあいいや。

とりあえず、ポツと浮き出たように完成させた第十二話をどうぞ。

第二十二話 ライオトルーパー

そこには立っていた。

たった一人の友を救出するために、無数の怪人を斬り倒した赤いライダーが。

「これで終わりか！」

静寂な空間を、龍騎の叫び声突き抜ける。

だが、その声は少し響く後に煙のように消え去った。

それを確認すると、静かに足を踏み出し、ガラスの破片を踏み潰しながら先へ進む。

このビルは完全防音設計になっているのか、ビルに踏み込んだ後、外からの雑音は一切耳に届かない。

その逆もまたしかりだろう、どれだけ激しい戦いを繰り広げても、人影は見えない。

ようするに、いくら叫ぼうと助けは来ない。

ここで起きた惨劇は、うやむやになって消えるのだ。

おそらく、相手はこのビルに一人ずつ呼び出して、抹殺していくのである。

圧倒的に確実で、手っ取り早い方法である。

「（でも、俺は死なない・・・）」

心でそう念じていると、上りきった階段の向こうに長い廊下が姿を現した。

壁には、無数の扉。

その全てには、敵が飛び出してくる可能性が秘められている。

最期まで、気は抜けない。

改めて戦場の空気を実感して、右手の剣を強く握る。

「――！！！」

突然、背後から無数の銃弾が突っ込んでくる。

龍騎は剣でなぎ払いながら、横に避ける。

敵は・・・

「・・・ライダー？」

そう、敵は怪人ではなかった。

しかも、同じ姿で5体ほどいる。

そのライダーの名は『ライオトルーパー』。

低コストで量産するために開発されたそのシステムは、かなり弱い部類に入る。

しかし、「ライオトルーパー」の真髄は、その人数と手数之多さである。

現に、5人のライオトルーパーは散り散りに別れ、次々と攻撃を繰り返す。

攻撃一発の威力は小さい。

だが何発も打ち込まれてダメージが蓄積されると、話は変わってくる。

「（・・・クッ！）」

{ADVENT}

壁を突き破り、「ドラグレッダー」が5人目掛けて突進を仕掛ける。すかさず避けるトルーパーであったが、その膨大なリーチの前に一人が捕まり、そのまま壁に衝突する。

ベルトもアーマーも壊れ、変身が解除された。

変身の主は、壁から床に落ち、立ち上がろうとした瞬間にその身を崩した。

ちなみに、この変身者たちは、全員が怪人「オルフェノク」である。

「クッ、態勢を乱すな！ たかが一人欠けたところ——」

「——ろで戦況は変わらないとでも？」

「！！」

{STRIKE VENT}

残ったメンバーに指示を飛ばしていた一人に、龍の拳が直撃する。懐から勢い良く繰り出されたアッパーは、アーマー越しに顎の骨を砕き、さらに後方へと吹き飛ばした。

「ガァァ・・・」

「ひっ・・・う、うわあああああ！！」

トルーパーの一人が、口から漏れ出す血も気にせず顎を押さえて悶え苦しむ仲間の姿に恐怖し、おもむろに銃を乱発する。

軌道は滅茶苦茶で、全体の統制も崩してしまった。

「怪物が恐怖してどうすんだよ！」

「グアアアア！！」

龍騎のセイバーが、トルーパーのアーマーを、斜め縦に切り裂く。その勢いで、そいつは吹き飛んだ。

「さあ、残り2人。・・・覚悟はいいか？」

龍騎はセイバーを床に叩くようにして差し込む。

そして、深く腰を落としてドラグクローを構える。

それに呼応して、ドラグレッダーも龍騎の後ろで構える。

「に、逃げろ！」

「逃がすか！」

次の瞬間、突き出されたクローの方向どおりの炎が、2人を狙う。絶叫を上げるまもなく、アーマーごと灰になって消滅した。

「まだやるか？俺は構わないぜ」

「畜生ッ！」

倒された中で最も傷が軽い一人が、銃で床を撃つ。

突如、瓦礫と煙が舞い上がる。

だが、そんなものは龍騎の邪魔にはならない。

剣の一振りで、全ての瓦礫・煙は消え去った。

しかし、その先に人影はない。

「・・・やられた」

龍騎は軽く地面を踏みつけると、おそらくトルーパーが逃げたであ

ろう道筋を辿り、よりビルの核心へと近づいていった。

第二十二話 ライオトルーパー（後書き）

おつかれ。

今回、なんもなかった気がするんだ。

ちよっと戦っただけだお。

だから、一話の量をもっと増やそうかと。

今までは少なすぎたね。いくらなんでも。

だから、ちよっと次回から量が増えるかもしれないから気をつけてね。

それじゃ。

何か、最近ずっと溜め口な気がする。

第二十三話 仲間（前書き）

「長文にするぜ、ウオーーーー!!」

←

「ちょっと疲れた、また今度にしよう」

←

「あれ？気づくともう2週間過ぎてるお」

←

「駄目だ、もう疲れた」

そんな感じの二十三話、どうぞ。

第二十三話 仲間

ライオトルーパーを追って龍騎が訪れた場所は、大きな会議室のような部屋だった。

長い長方形型のテーブルとパイプイスが無数に並んでいる。

部屋に入る扉の前には、確かにライオトルーパーの逃亡した痕跡があったのだが、部屋の中に入った途端痕跡が綺麗サッパリ消えていた。

張り詰めるのは、異常なまでも静かな空間。

まるで、わざと音を立たせていないような・・・

「―――!!」

龍騎が気づいたときには、既に大量の怪人・ライオトルーパーが部屋の物陰や壁の向こうから飛び出していた。

この部屋の壁はほ全壊し、隣の部屋まで見通せる大きな空間になる。そして、大きな怪人の波はそのまま龍騎に直撃する。

「やるか・・・!」

{GUARD VENT}

龍騎の肩に、2つの「ドラグシールド」が装備される。

それにより左右の攻撃を防いだ後、それを弾き飛ばすように回転して、前後の敵を斬り飛ばす。

間髪いれず、目の前の敵を「ドラグクロー」で殴り飛ばし、後ろ蹴りで後方の敵を蹴る。

方向を変え、襲い掛かる敵を「ドラグセイバー」で斬り倒す。

そんな流れるような動きで、次々と怪人をなぎ払っていく。

だが、いくら龍騎が圧倒的でも、多数を相手にすれば、限界はある。

「シャアアア！」

一体の怪人が、一瞬で龍騎の懷にもぐりこみ、龍騎に攻撃を加える。

『クロックアップ』

成体ワームが使う、超高速移動の総称。

目には残像しか映らず、その動きをある程度読めるもの、または同じ「クロックアップ」を使える者以外は、太刀打ちできない能力である。

今の龍騎が、一対一で対決すれば打ち勝てるかもしれないが、状況は多対一。

クロックアップに目を奪われれば、必ず隙が出来てしまう。

「はあああ！」

「！！　グッ・・・」

ワームに気をとられている隙に、ファンガイアの攻撃を喰らってしまう。

龍騎は力強くふんばるが、同時にグロンギ」とアンノウンの攻撃も

受けてしまい、体勢が崩れてしまう。

だが、倒れざまに剣を振るい2体に攻撃を加える。それは周囲への牽制にもなり、倒れる隙を突かれることを防ぐためでもあった。

が、クロックアップの前には無意味である。

龍騎の体が地に着くより速く、ワームの攻撃が龍騎の装甲を叩いた。アップーのような攻撃により、龍騎は中空へ飛ぶ。

そこを狙い、複数の怪人の遠距離系攻撃が炸裂する。威力は高く、怪人の集団を抜けて壁に激突する。

「（やばい・・・意識が朦朧としてきた・・・視界が・・・かすむ・・・）」

フラフラと危なっかしい動きで、龍騎は立ち上がる。

だが、何の遠慮もなく、龍騎への攻撃は続く。

もう防御をする力しか無い。

そんな状況でも、龍騎は決して剣を離さなかった。

絶対に友を助けると強く誓い、何かを信じて。

だが現実はどううまくはいかない。

現にもう体力は限界、いつ殺されてもおかしくは無い。

だから、龍騎は剣を握った。

一体でも多く敵を倒し、後に続く仲間が少しでも楽になるように。

「う・・・おおおおおおお！！！」

魂の叫びと共に、龍騎のセイバーが振られる。
それは眼前の敵をなぎ払う、が後方からまたすぐに新たな怪人が現れる。

「（もう・・・ここまでか・・・）」

体力が尽き果て、龍騎は静かに地面に倒れさる。

その瞬間。

EXCEED CHARGE
イ・ク・サ・ナツ・ク・ル・ラ・イ・ズ・アツ・プ

2つの音声が響き渡る。

と、次の瞬間には、2つの攻撃によりいたるところで爆発が起きる。

「なんだ!？」

「別のライダーか？」

「かまわん、皆殺しだ!!」

怪人にもどよめきが広がるが、すぐにまた龍騎へ意識が向く。

「そう思い通りにはさせませんよ?」

どこからか大量の弾が飛来し、怪人たちが真横に吹き飛ぶ。
龍騎が弾の飛来元を見ると・・・

「・・・威伊塚!？」

「はい、遅れました」

そこには、片手に銃を持って歩いてくる「威吹鬼」の姿があった。
それではと辺りを見回すと、こちらへ走ってくる「ファイズ」と「イクサ」の姿もあった。

「なんで・・・ここへ？」

「なんでって、誠斗を助けにだけど？」

ファイズは龍騎に手をかし、立ち上がるのを手伝う。

「だって、俺はここへ来ることを誰にも伝えていませんよ？」

「うん。知らなかったよ？」

「じゃあ、なん」どこぞの馬鹿がいなくなったって、咲塚が涙目で俺に伝えに来たんだよ」え・・・」

草名護が、いたって面倒くさそうに解説する。

「咲塚がずいぶんと傷心中だったお前を心配して、今日電話をかけたらお前がいなかったんだとよ」

「そこで、咲塚が草名護の病室に押し入って状況を説明したんです」

「ああ。3日前にサイトが拉致られたとか、お前が敵のアジト見つけたのかな」

「それで、草名護が病院抜け出してそのアジトに行くっていうから、

俺も着いていたら・・・」

「なんでか威伊塚が待ち伏せしてたんだよ」

「はい。二人の声は大きいし、僕はちょうど真下の病室でしたからね」

3人が流れるように説明するが、実は誠斗は途中から耳に入っていなかった。

思考の波が、渦巻いていた。

さまざまな思いが、脳を駆け巡る。

一人で敵の本拠地に向かい、絶対に仲間を助けると誓い、剣を強く握り、一体でも多くの敵を倒すとがむしやりに戦い、死を覚悟し。

これは自分の無力が招いた。

これは自分に責任がある。

そう思って、誰にもこのことは伝えなかった。

なのに・・・

「? どうしたの、誠斗?」

「ふん、戦いすぎて疲れたか?」

「誠斗君はよく戦ってくれましたよ」

こうして、目の前には仲間がいる。

なにも言わなくても、自分を心配してくれて、駆けつけてくれた。

「・・・フツ、ハハハ」

「む、何が可笑しいんだ、誠斗!」

「あ、いや、すみません・・・」

嬉しい。

仮面によって素顔は見えないが、確かに誠斗の頬を涙が伝わった。

「つと、まだ敵はいるんだっけ」

「とっとと倒して、サイト君を返してもらいましょうか」

「そうだな、久しぶりに暴れるか・・・！」

3人が駆けつけて確かに戦力は増えたが、敵はまだまだ数を残している。

勝てるかどうかは分からないのである。

しかし、3人はそれを一手に引き受けて誠斗を行かせようとしている。

「雑魚共は俺に任せておけ」

「誠斗は早くサイトを救出してきてね」

「がんばってください。それでは・・・」

それだけ言って、3人は怪人の群れに走っていった。

誠斗は少しだけ呆然としたが、またすぐに決意を思い出して、走り出した。

仲間のもとへ。

第二十三話 仲間（後書き）

平均的に見ると、5割増し。

感覚的に見ると、2割増し。

どういうこったい。

意気込んだ分だけ、反動がすごかったです。

もう飽きたからとっととライターライターした場面に行こう、そうしよう。

ということ、自分の限界まで描写を使ってやった今話です。力量の無さがあらわになりましたね、もうなんかスイマセン。

まあ、特に何か変わったわけじゃないですね、ハイ。

ゆっくりのんびり行こうと思います。

それでは、また次回。

第二十四話 思い、覚醒へ（前書き）

今回は、いつもよりボリュームアップの回。

これが現時点での本気なんです。

読み応えがあったら、嬉しいです。

それでは第二十四話、どうぞ。

第二十四話 思い、覚醒へ

先ほど戦闘のあったフロアのさらに上階。

そこは、ただの雑居ビルとは思えない、異様な空間であった。

「・・・研究室？」

その空間に窓は一切無く、外からの光は完全に遮断されていた。

変わりにこの部屋を照らしているものは、部屋の側面に並ぶ大きなコンピューターのディスプレイの光である。

そして、そのコンピューターらには大量のコードが繋がっており、それはとある一つの物に集まっていた。

「これは・・・」

「そう、怪人だよ。誠斗君」

「！」

大量のコードは、一つの大きなポットに繋がっていた。

中には青い液体が充滿しており、かろうじて形を確認できるような怪人が浮かんでいた。

「・・・これは何だ、デルタ」

「おや、声だけで分かりますか。これはこれは、私の認知度も上がったものです」

「いいから答えろ・・・！」

龍騎は左手に力をこめる。

そして、手に持っていたセイバーを力の限りを尽くしコンピュータへ飛ばす。

「おや、そんな事をされては困りますね」

「!？」

龍騎の目線がセイバーの方向に行ったときには、既に目の前にセイバーを握っているデルタが立っていた。

「ハァ！」

「ガッ・・・！」

デルタの振るうセイバーを、肩のシールドで防ぐ。

その一撃は見かけに反して重く、龍騎は横手になぎ払われる。

「しかし・・・、逃げられても困りますからねえ・・・？」

デルタは右手のセイバーを横に捨てると、左手で指を鳴らした。
その瞬間・・・

{CLOCK UP}

どこからともなく聞こえた電子音の僅か数秒後、紫の残像が龍騎の体を斬りつける。

「ガッ・・・!？」

攻撃を受けた龍騎の体は吹き飛び、部屋の奥へと転がった。

「ふふ・・・。ここからが本番ですよ・・・」

「何・・・だと・・・?」

デルタは不敵に笑うと、ベルト側面に付属しているデジタルビデオカメラ型の銃である『デルタムーバー』を取り外す。

「Fire」

〔Burst Mode〕

音声でコマンド入力をし、その銃先を龍騎に向ける。

何をするか予想がついた龍騎は急いで肩のシールドを構える。それによってデルタの光弾を防御した龍騎であったが・・・、

「ハハハ、楽しませてくれよ?」

「!?!」

真横からサソードが襲い掛かる。

サソードは剣を横方向に振るい、龍騎の体を斬りつける。

その衝撃で龍騎は壁にたたきつけられ、それを狙って放たれたデルタの光弾が龍騎にダメージを与えていく。

その攻撃が止んだと思った瞬間にも、サソードが剣を突き立ててくる。

龍騎はクローでそれを防ぐが、ヤイバーに押される圧力で壁に押し付けられる。

その圧力は凄まじく、次第には壁にヒビが入る。

龍騎が、負けを覚悟する。

その瞬間。

壁が、激しく崩壊する。

それにより大量の土煙が立ち、龍騎の姿が見えなくなる。
サソードが剣を振り回し、土煙を払ったときには、既に龍騎はいなくなっていた。

「ハッ！逃がさねえぞ・・・」

{CLOCK UP}

サソードはバックル脇のスイッチを押し、超高速移動「クロックアップ」を始動させる。
すぐにその姿は残像になり、龍騎と同じく姿を消した。

「・・・やれやれ」

デルタはため息を吐きながら、サソードと同じく壁の穴を越え、龍騎の追跡を始める。
ゆっくり、ゆっくりと。

く廃墟ビル・とある一室く

「・・・・・・・・・・クソッ」

その部屋も窓は無く、明かりは天井についている。
唯一部屋を照らしているものは、カーテンの隙間から差し込む僅かな光である。
そんな薄暗い部屋のベッドに腰掛けて、サイトは深く考え事をしていた。

「（・・・俺のために・・・みんなが戦ってるのか・・・）」

「三浦 涼太」と名乗る男に拉致されてから3日がたった。

食料や衣服、風呂など必要最低限の事は用意されており、特に問題はなかった。

電話・メールなど外との連絡手段は没収されているが、自分は一人暮らしなので親が警察に届け出ることもない。

学校でも、誠斗らがうまくやってくれているだろう。

そう、問題は無かったのだ。

だが、突如として発生したビルの揺れがそれを打ち砕いた。

最初はサイトにも何が起こったか分からなかったが、徐々にひとつの考えが浮かび上がる。

「戦いが始まった」

つまり、それは誠斗達が自分のために命を懸けて戦っているということ。

そう考えると、サイトは悔やんでも悔やみきれなかった。

混沌が渦巻く中、ベットに倒れこむ。

「・・・クソッ・・・」

ただ意味も無く呟く。

それは部屋に薄く響き渡り、

ドアの開く音がした。

サイトは敵が来たのかと思い、とっさに立ち上がる。

そして、恐る恐るドアの方を見る。
するとそこにいたのは・・・

「誠斗!!」

「・・・サイトか・・・無事か・・・？」

そこには、体のいたるところから血を流し、壁に寄りかからないと倒れてしまうような、ボロボロの誠斗がいた。

サイトはすぐに誠斗の元へ駆け寄り、体を支えて椅子に座らせた。

「サイト・・・いますぐ逃げるぞ・・・。追ってはすぐ来る」

「逃げるって・・・そんなことより、誠斗は大丈夫なの!？」

「ああ・・・、俺は大丈夫だから——」

「・・・だから？」

「「!？」」

突如、部屋に入ってきたのは剣を携えたサソード。

誠斗が後ろを振り向いたときには既にサソードは誠斗の襟元を掴んでいた。

そのまま誠斗は強引に椅子から壁に投げつけられた。

もちろん、既にボロボロであった誠斗は抵抗も無く壁から床に倒れ落ちる。

「散々イラつかせやがって・・・」

崩れ落ちている誠斗の首に、手を伸ばす。
それをゆっくりと上に持ち上げる。

首を絞められてうまく息が出来ない誠斗は、足を僅かにばたつかせ、必死に抵抗をする。

「フハハハハ！苦しめ、もっと苦しめ！」

その姿に満足したかのように、サソードは誠斗を蹴り飛ばす。ドア近くまで転がった誠斗は、もう何の反応もしなくなる。

サソードはそこへ近づこうとするが、

「・・・ああ？」

「も、もうそれ以上・・・誠斗に近づくな！」

テーブルの上に置いてあった重い灰皿が、サソードの背中にぶつかる。

それによるダメージは微々たる物だが、神経は逆撫でられる。

「ハア・・・。これ以上、俺をいらつかせるな！」

サソードは怒号とともにサイトを殴り飛ばす。

サイトは一回壁にぶつかり、ベッドへと落ちる。

それを見て機嫌を取り戻したサソードは、ゆっくりと誠斗に近づいていく。

そして、剣で確実に貫ける位置まで歩くと、少しだけ後ろに振り向いた。

「おい人質。おれは一撃でこいつを殺せるところまで来た」

「・・・？」

「こいつは、何のためにここまで来たんだ？」

「――！！！」

それは、心をえぐり取る魔の言葉。

それも、サイトが後悔していると真ん中の気持ちをえぐり取る。

誠斗がここへ来た理由。

それは、怪人やライダーを倒すためではない。

『誘拐されたサイトを助けるため』だけに、危険を冒してまでこのビルに入ってきたのだ。

つまり、ここで誠斗が死んでしまうということは――

――それは自分が殺したということになる。

それだけは絶対に。

自分が仲間を裏切る前に。

命を懸けて。

「やめろおおおおおおお!!!!」

止めなければならない!!

「・・・?」

サソードは確かに剣を振り下ろした。

だが、それは誠斗の体を切り裂く前に何かにぶつかって止まった。その「何か」は、サソードの剣を力で押し返した。

「なんだぁ・・・？」

サソードは後ろへ下がり、距離を置く。

そして、改めてその「何か」を確認する。

それは・・・

「ガタック・・・ゼクターだど？」

その「何か」の正体とは、青いボディのクワガタムシ型昆虫コア『ガタックゼクター』であった。

「こいつは装着者が見つからず、地下で管理していたはず・・・
・まさか！」

サソードは素早く後ろに振り返る。

そこには、サイトと、いつのまにか移動していたガタックゼクターがいた。

「やっぱりなぁ・・・。お前が装着者だったのか・・・、クソッ！」
「!？」

サソードが突然、怒りの矛先をサイトへ向ける。

激しい攻撃が繰り出されるが、その攻撃はガタックゼクターの援護により、サイトに当たることは無かった。

そして、サイトはサソードの横を抜けるようにして、誠斗の前に立つ。

「何だ・・・？俺に何かあるのか？」

「クッ！」

「！！」

とうとうガタツクゼクターは、サソードの攻撃により横手へなぎ払われた。

そして、そのまま他には目もくれず、サソードはサイトへ剣を振るった。

「よくがんばったね、サイト！」

「！？」

サソードの真横に位置する壁が、一瞬で崩壊した。

その時に飛び火した瓦礫の山が、サソードの行動を妨げる。

そして、その奥からは一人のライダーが現れた。

「フ・・・ファイズ！」

「サイト、急いでこれを巻くんだ」

「え？」

奥から歩いてきたファイズは、おもむろにある物をサイトに投げつけた。

それは、ベルト。

銀色に輝く、ライダーベルトだった。

「これ以上俺をおらつかせるなど・・・言っただろうが！」

瓦礫を跳ね除け、サソードが剣を振るう。

ファイズは、右手に持つデジタルカメラ型パンチングユニット『ファイズショット』でそれを防ぐ。

「サイト！変身するんだ！」

「変身！？俺が・・・？」

サイトはベルトを見て、少しだけ困惑した表情になる。

しかし、すぐにその表情は意を決めた顔になる。

サイトは、ベルトを腰に巻く。

「うらああ！！」

「クッ・・・！」

サソードは剣を大きく振り、ファイズを床に叩き伏せる。

そして、荒々しく剣を振ってサイトの方を見る。

だが、そこで動きが止まった。

サイトの雰囲気が一瞬前とまったく違うからだ。

右手にガタツクゼクターを持ち、真っ直ぐサソードを見据えている。

「・・・変・・・身！！！」

{H e n s h i n }

ベルトに、ガタックゼクターがセットされる。
瞬時にゼクターは反応し、電子音を鳴らす。
同時に、サイトの体をアーマーが覆っていく。

仮面ライダー『ガタック』が、ここに降臨する。

「・・・行くぞ・・・！」

第二十四話 思い、覚醒へ（後書き）

サイトがとうとうライダーへ。

これで、役立たず返上です。

他にも、謎の怪人が登場。

想像するだけでワクワクしますね！（なにを言っているのか

それでは、今回はこれまで。

次回をお楽しみに。

第二十五話 音速の戦士（前書き）

前回と同じ日にちでの連続投稿。

今回限りかもしれない特別な展開です。

とりあえず、今回もあらたに出てくることがあるので、楽しんでもらえれば幸いです。

それでは第二十五話、どうぞ。

第二十五話 音速の戦士

「・・・とうとう変身したか・・・」

「・・・」

2人のライダーは向き合う。

静かに、ゆっくり。

そして、瓦礫が崩れる音がする。
瞬間。

「うおお！」

「はああ！」

2人のライダーが激突する。

サソードの剣が振るわれる。

ガタツクはそれを横に避けて横蹴りを放つ。

それは剣で防がれ、逆に斬りつけられる。

それによりガタツクは後ろへ下がる。

と同時に。

「キャストオフ!!」

{cast off}

その電子音と共にガタツクの装甲は弾け飛び、サソードへの攻撃となる。

同時に、頭部左右に倒れていたガタツクホーンが立ち上がり、側頭部の定位置に収まる。

Change Stag Beetle

「じゃあ！」

「クソ野郎が・・・！」

ガタツクは、アーマーの下から出てきた一对の曲剣『ガタツクダブルカリバー』を両手に取り、サソードの剣に対抗する。サソードもそれに応じるよう、剣を振るう。

「クロックアップ！！」

CLOCK UP

2人のライダーは同時にスイッチを押し、超高速移動を開始する。それにより、一瞬で2人は残像を残してこの場から消え去った。

「・・・たく、派手にやってくれますね、皆さん。これの修理代、いくらするか知ってます？」

「・・・デルタか」

ファイズが破壊した壁から、デルタひょっこり現れた。

「サイト君が覚醒して盛り上がっているとところ失礼ですが・・・、勝率が上昇した訳では無いんですよ？」

デルタは冷静にそう告げると、腰のデルタムーバーを手にとった。ファイズはゆっくりと立ち上がり、ドライバーから「ファイズフォーン」を抜き取りコードを入力した。

「・・・ファイア」

{Burst Mode}

そこからは刹那だった。

0.1秒単位での動きが繰り返され、部屋を光弾が行きかう。

両者の実力は、ほぼ同等に見えた。

しかし・・・

「あなたは所詮、私には勝てないですよ」

「何!？」

飛び交う弾を機敏によけ、一瞬で移動したデルタは、強烈な右ストレートをファイズの腹に叩き込む。

続けざまに近距離からの射撃を放ち、再度距離をとる。

ファイズは踏ん張りを利かせて立ち止まり、後方へ逃げるデルタ目掛けて右手の「ファイズショット」を突き出す。

「遅い」

「!!」

気がついたときには既にデルタはファイズの右手の横をすり抜けていた。

そして、カウンターの要領でファイズの顔面に拳を叩き込んだ。

重い一撃を食らったファイズは、のけぞる前に後ろへ吹き飛び、先ほど自分があけた穴まで飛んでいった。

「弱い。弱い、弱い弱い!これなら、いちいち策を講じるまでも無く、私が直接叩きつけたほうが良かったかもしれないね」

「・・・」

呆れたように、デルタは左手を額に当ててうつむく。
その様子はまるで、期待していた遊びがつまらなかったときの子供のような。

そんな余裕を見せる態度であった。

だが、そんな様子を見たファイズが静かに立ち上がった。
小さな笑い声をたてながら。

「・・・あなたにそんな余裕があるのですか、咲塚君？」

「・・・いくら強いお前でも、自分の手の内が利用されるなんて想像してないよね・・・？」

「？ いったい何の話を「ここに来る前に、ちょっと地下に寄ってきたんだよね・・・」

「・・・地下？・・・まさか、お前!!」

誠斗は、微かに働く意識を必死に振り絞って、2人の会話を聞いていた。

咲塚が「地下」と言った瞬間に、デルタの声が急に荒々しくなった。
誠斗が最後の力を振り絞って顔をあげると、ファイズが何かを取り出した。

「・・・!」

誠斗の意識はそこで途切れた。
誠斗が最後に見たもの。
それは、

「(・・・時計?)」

デルタは先ほどの会話から、急に緊張した雰囲気になった。
打って変わってファイズは、急に自信満々でデルタと向き合っている。

「・・・ファイズ、貴様、一体何を？」

「このビルって、結構大量にアイテムを取り揃えているんだね。ライオトルーパーのベルトも、ガタツクのベルトも。・・・『超音速の戦士になるための時計』なんかもね」

その一言で、デルタは動きを止める。

「・・・まさかお前、「ファイズアクセル」を!?」

「そのとおり！」

ファイズは、左手首にリストウォッチ型コントロールデバイスである『ファイズアクセル』を装着。

そして、それにセットしているプログラムキー『アクセルメモリー』をファイズフォンに挿入した。

{Complete}

その電子音の後、ファイズの胸部アーマーが大きく展開した。
それが肩に収まると、眼は赤に、全身を駆け巡るフォトンストリームは銀へ変化した。

胸の中心でブラッディコアが光る、ファイズの超高速形態。

『アクセルフォーム』である。

第二十五話 音速の戦士（後書き）

ファイズの新フォーム、アクセル登場です。

俺、このフォーム大好きなんだ！（聞いてない

2発連続で新ライダー、新フォームと急展開です。

本当のことを言うと、とっとと出さないと次へ進まないんです。はい。

まあ、それでも個人的には書き応えがあったんで、良かったです。

それでは、今回はここまで。

次回でまた会いましょう。

第二十六話 戦闘終結（前書き）

イエーイ！

とうとうアクセルファイズが暴れまくるぜえ！

イヤッホー！

すいません、気が狂いました。

でも大好きなんです、ファイズのアクセルフォーム。

あのかっこいいフォームに超加速能力。

最高ですね。

という感じの第二十六話、どうぞー。

第二十六話 戦闘終結

「クッ・・・させるか！」

唐突に叫び、デルタが弾を乱射する。

ファイズはそれを的確に回避し、冷静さを欠いたデルタに強烈な右ストレートを食らわせる。

さらに、回し蹴りでデルタを後方に吹き飛ばす。

「さて、そろそろいくよ」

ファイズはそう言って、「ファイズショット」に差し込んでいる「ミッションメモリー」を「ファイズポインター」に入れ替える。

そして、「ファイズアクセル」のスタータースイッチである赤いボタンを押す。

{Start Up}

「はああああ!!」

雄叫びとともに、ファイズは一気に加速する。

ファイズは待機状態の『アイドリングモード』から加速状態の『アクセルモード』へ移行をした。

凄まじいエンジン音が鳴り、その姿は残像になる。

10秒限定の超加速。

デルタは絶対に追いつけはしない。

「ク、クソ！」

やけくそでデルタが弾を放つ。

しかし、圧倒的速さで移動するファイズにはかすりもしない。

逆に、拳と蹴り続けさまに浴びせられる。

対してファイズは、一旦停止、手首をスナップさせてから再び加速するという余裕を見せる。

「チェック！・・・グッ・・・」

Ready Exceed Charge

デルタは自身の必殺技である『ルシファーズハンマー』を発動するため、音声入力をする。

が、高速移動するファイズに標準を合わせることは出来ない。

「そろそろ、こっちがチェックメイトといくよ！」

Exceed Charge

ファイズはバックルの「ファイズフォン」を開き、「ENTER」のボタンを押す。

それにより生まれたエネルギーは、メモリーへ誘導され、ポインターにチャージされる。

そして、身動きが取れないデルタにそのポインターの付いた右足を突きつける。

デルタは蹴り飛ばされると同時に、円錐状のポイントによりロック

オンされる。

「たああああ!!」

ファイズは加速を行かして飛び、そのまま高速でポイントに飛び込む。

高速回転する赤い円錐が、デルタの装甲を一気に削り上げる。

{3...2...1...}

「アクセルモード」の終了を告げるカウントダウンが始まる。

「畜生があああああ!!!!」

{Time Out}

終了の合図と共に、デルタはΦの模様を浮かべてその場に倒れこんだ。

「・・・終わった・・・」

{Reformation}

電子音を最後に、ファイズの姿が通常のものへと戻る。

「・・・そうだ、誠斗!」

咲塚は変身を解除し、誠斗の元へ寄る。

誠斗は気絶しており、その場にグッタリと倒れていた。服のいたるところが、血で赤くにじんでいる。

「（・・・ハア、無茶して・・・）」

まあいいか、と咲塚は誠斗を抱えて立ち上がる。

そして、出口であるドアへ向かう。

すると。

「・・・これで終わりだとは・・・思わないことですよ・・・」
「!!」

不意に後ろから声をかけられる。

そこには、変身は強制解除され、壁に寄り添わないと立つことすらままならないような三浦がいた。

「ここでの戦闘は・・・テストなんですよ・・・？」
「・・・どういことだ」

咲塚が慎重に意味を尋ねる。

すると三浦は、ふざけたように笑い出す。

「フッフ・・・あなた達の戦力を測るために・・・ここで戦わされていたのですよ・・・」

「・・・それだけなのか？」

「まさか・・・あなたがそれを手に入れるとは・・・思いませんでした
すが・・・ハハッ」

「質問に答えろ！」

咲塚が叫ぶと、三浦は笑いを止める。

「これで・・・戦いは確実に激化する・・・あなた達は、自らの手
で・・・平和を崩したのですよ・・・」

「なんだ——」

咲塚が言葉を紡ぐ前に、三浦は「クロックアップ」で現れたサソー
ドに回収され、姿を消した。

「・・・戦力調査・・・あいつらの上がいるのか・・・？」

疑問符を頭に浮かべる咲塚の下へ、サソードより一步遅れでガタッ
クが現れた。

「クソ、あいつ、やっぱり逃げやがったか！・・・って、咲塚さん
！それに誠斗も！！」

慌しく現れたと思いきや、咲塚を見つけるなり変身を解除して近寄
る。

「すいません、咲塚さん。あいつ、戦ってる最中にいきなり『・・・
今はこれ以上戦っても意味が無いな』とか言って逃げやがったんで
すよ！」

「うん、分かってるよ。どうやらここでの戦いは、戦力調査のため
のものだったらしいんだ」

「ええ！？」

驚愕するサイト。

そこへ、残りの2人も合流する。

「チッ。ある程度敵が片付いた後、急に別行動しやがって・・・」

「まあまあ。どうやら敵は退散したみたいですし」

「ハハッ」

その後、4人は気絶している誠斗を家に届けた後、解散して各々の家へと帰っていった。

事態は、何とか全員生還という形で難を逃れた。

だが、三浦が言った「戦いの激化」。

これが、そう遠くない未来で実現するのは、今は誰も予想はしなかった。

第二十六話 戦闘終結（後書き）

第一章完。

です。

個人的にこれを切り目にして、次の章へ行きたいと思います。
何か、章ってプロの小説家みたいで良いね！

次からは、ライダーパラダイス（予定）。

たっくさんのライダーが現れます！

戦闘も激しくなること間違い無しだね！

・・・5人で立ち向かえるのかい？

第二十七話 誠斗、問題に突き当たる（前書き）

前回の投稿から1ヶ月経っているだど！？
おのれディケイドオオオオ！

すいません、ふざけました。
二十七話、どうぞ。

第二十七話 誠斗、問題に突き当たる

今日は高校で終業式が行われ、1学期が終わった。

そして、明日からは生徒の待ち焦がれる伝説のイベント、夏休みが始まるのである。

そんな晴れ晴れしい日の中、我らがヒーロー・誠斗は――

「変身できねえええええ！」

——
叫んでいた。

時はさかのぼり、3時間前。

誠斗は学校から帰宅し、明日からの予定を考えて浮かれていた。

すると、そこへサイトが来て、ゲームセンターへ遊びに行くことになった。

アーケードゲームをしていると、どこからか草名護が現れ、2人と一緒に行動することになった。

3人でぶらついていると、カフェで巨大パフェに挑んでいる咲塚を発見、みんなで食べることに。

咲塚が図書館へ行く途中ということで、みんなで図書館へ。

そこで静かに読書を嗜んでいた威伊塚と合流した。
その後、5人で宿題をしようと、家へ戻っている最中……。

「キャアーーーーー！」

突如、響き渡る叫び声。

それを聞いた5人はすぐさま駆けつけると、3体の怪人が人々を襲っていた。

草名護とサイトがすぐさま飛び出し、2体の怪人とどこかへ行ってしまった。

3人もすかさず変身しようとしたところ、背後から巨大な魔化魍が出現。

威伊塚が変身、魔化魍と戦闘を開始。

残った咲塚も変身、誠斗も変身しようとしたところ……。

「……？」

デッキをかざしても、ベルトが出現しなかった。

いくら試しても無理で、おもむろにデッキ表面を見ると……。

「……紋章が割れてる!？」

金色に輝く龍騎のマークに、ヒビが入っていたのである。

衝撃的な事実を突きつけられた誠斗は、力の限りを尽くして叫んだのであった……。

「なんだこれ!？ ふざけんなよおおおお！」

誠斗が再び叫ぶと、それに呼応するように、イマジンが現れた。

「誠斗・・・何してんの？」

「いや、変身が出来ないんですけど!？」

ややあきれ気味に、咲塚が誠斗を見る。

デッキを手に持って、半泣きの誠斗。

ファイズは深いため息をつきながら、自分のバッグの中から何かを取り出した。

「・・・何ですか？それ」

「前、デルタ達と戦ったビルの下から拝借してきた、ライオトルーパーの変身ベルト『スマートバックル』だよ」

ファイズは誠斗の腰にベルトを強引に巻くと、バックルを横に倒した。

すると、誠斗は光に包まれて「ライオトルーパー」に変身した。

「・・・何か、すごい弱そうなフォルムなんですけど・・・」

「本当にそうだから仕方が無いよ。ほら、行くよ!」

ファイズはそう言うのと、そうそうと怪人の元へ走っていった。

仕方がないとばかりに、ライオトルーパーもイマジンと対峙する。

「っしや、行くぞ!」

ついにやる気を出した誠斗。

そして、自慢の右ストレートをイマジンの懐に入れる!

「・・・はあ？」

「へ？」

確かに、ライオトルーパーの拳は怪人の腹に直撃した。
問題は、あまりにも低い威力である。

ライオトルーパーは、低コストで量産されたライダーである。
だが、その真髄は数により集団戦法であり、あくまで数で押し切る
弱小ライダーなのだ。

弱さで言うところ、どこぞのブランクや、どこぞのプラットとほぼ一緒
である。

そんな間にも、ライオトルーパーはイマジンの攻撃を喰らっていた。
低いステータスをあざ笑うかのように、イマジンは攻撃の嵐をライ
オトルーパーにぶつける。

「おらおらあ！ライダーってのはこんなもんなのかあ！？」

「グッ・・・、いつもならこんなやつ・・・。グハッ！」

渾身の一撃により、とうとうライオトルーパーは遥か後方へ吹き飛
び、ベルトも外れて変身が解除されてしまった。

「ク・・・らああ！」

最後の悪あがきのように、誠斗は手元にあるスマートバツクルをイ
マジンめがけて投げつける。

だが、当然のようにそれは弾かれてしまった。

「終わりだ。ハァァ！」

「（！！　もう、駄目か・・・！？）」

あいかわらず龍騎のデッキにはヒビが入っており、今でも変身は出来ない様子だった。

誠斗は強く目を閉じ、敗北・死を覚悟した。

そのとき。

「おや、イマジンではないか」

誠斗の脳に、直接声が響いたと思ったら。

自分の体から砂が零れ落ち。

何かのエネルギー体が自分の体に入り込んだ。

白色のメッシュが入った髪、白色の瞳。

肩を覆う大きなフェザー。

そして、黒色の『ライダーパス』。

イマジンの攻撃を華麗な動作で避けると、片手でイマジンを払いのけた。

「・・・一体なんだ？」

「今から倒す者に、名乗る必要もなからう」
「何だと!？」

憤怒するイマジンを無視して、謎の変化を遂げた誠斗は突如出現した『デノオウベルト』を腰に巻いた。
すると当たり一帯に、優雅な音楽が流れ始める。

「変身」

Wing Form

一言言うと、誠斗は右手に持つ「ライダーパス」をバックルに触れさせた。
すると、誠斗は光に包まれて、ライダーへ変身した。

青い仮面。

金色のスーツに白色の装甲。

背中には一瞬だけ翼が生えて、消えていく。

見ただけで優雅さが伝わるような、その姿。
誠斗は静かにこう言った。

「―――降臨、満を持して」

第二十七話 誠斗、問題に突き当たる（後書き）

はい、今回はあの鳥ちゃん登場でそた。

鳥ちゃんは出現方法が悩みどころだったのですが、主人公に憑依させるという斬新な方法をとりました。個人的に満足です。

今回は変身のみだったのですが、次回から活躍してもらおうと思います。

それでは、次回をお楽しみに。

第二十八話 降臨、満を持して（前書き）

なんだか前回からえらく時間が経ってしまいました。
つい先日までは暑い暑いいいながら冬を待ってたはずなのに、今はもうストーブが恋しくなる11月に・・・早かれな、時。君はいつも僕を置いてけぼりにする。

・・・ごめんなさい、調子乗りました。
それでは第二十八話、どうぞ。

第二十八話 降臨、満を持して

「あれ・・・誠斗なのか？」

自身も怪人と戦っているファイズは、その光景を凝視していた。

正体不明のエネルギー体が誠斗の体にもぐりこみ、突如として謎のライダーに変身したのだ。

そして、口調や仕草がどこか品を漂わせるような・・・。

「あぁん？急に姿が変わりやがった・・・まあ関係ないがな！」

突然の展開に困惑したイマジンであったが、すぐに目的を思い出し、攻撃を仕掛けるが。

「汚れた手で触れるな」

「はぁ!？」

誠斗（謎のライダーに変身中）は、イマジンの攻撃を避けると、イマジンを手で払いのけて蹴りを喰らわせる。

「ふむ、中々悪くない居心地だ」

誠斗はそう言いながら、ベルト側面の四分割型武器『デンガッシャー』を手際よく組み立てて『ハンドアックスモード』と『ブーメランモード』にして、イマジンに攻撃を加える。

その攻撃は凄まじいまでの連撃で、イマジンに反撃のチャンスを与える暇も無くダメージを与えていった。

「――我が刃の前にひれ伏せ！」

そう言う、誠斗はブーメランをイマジン目掛けて投げつけた。イマジンに屈むことにより間一髪でそれを避ける。

次に誠斗は「ライダーパス」をデンオウベルトにセタッチした。

{Full Charge}

すると誠斗がまだ持っているハンドアックスの刃が、金色の輝きを放つ。

・イマジンはその光景を凝視し、次のアクションに警戒していると・

「っ!？」

なんと、先ほど避けた筈のブーメランが真後ろから自分の背中に直撃したのだ。

予想外の攻撃とその威力にたじろぎ、注意深く見ていたハンドアックスから意識をそらしてしまう。

その一瞬。

今度は目の前からハンドアックスが飛来し、自分の胸に直撃したのだ。

そこへ高速移動してきた誠斗が最後の追い打ちとばかりにハンドアックスを左手に持ち、イマジンの体にその刀身を突き刺した。

そして、ハンドアックスをイマジンから抜き、辺りを飛び回っていたブーメランを右手でキャッチする。

「ぬ・・・ぐおお・・・」

2連撃をキレイに受けたイマジンのは、うめき声を上げながら地面に倒れ、爆発した。

「ふむ、こんなところか」

そう言って、誠斗はベルトを外した。

全身のアーマーが崩れるように消えると、また先ほどの誠斗が姿を見せる。

さらにその中から・・・

「この人間、憑き心地が中々良いな」

ブオッ！と誠斗の体内から、白いエネルギー状の何かが飛び出た。瞬間、誠斗は意識を失い地面に倒れこむ。

しかし、「それ」は気にすることも無く空中を漂いながら、体を作る。

それは、怪人にそっくりな。

いや、怪人そのままの。

何かが誠斗の目の前に現れた。

「・・・ん・・・俺はいつたい・・・？」

そして、誠斗が目を覚ました。

（誠斗宅）

「・・・で、お前は何なんだ」

床にあぐらをかいている誠斗。

その質問をぶつけたのは、足を組んで深々とイスに座っている・・・

鳥？

「だから先ほどこら言っているだろう。私の名は『ジーク』、華麗で美しい王子なのだ！」

戦闘からしばらく。

誠斗は目の前に怪人がたたずんでいることに一瞬命を諦めかけたが、その怪人がまた偉そうに話しかけてくることからいったん皆と別れて家に帰った。

そして、この逆尋問をしているわけである。

つか、何で怪人のお前が俺の椅子にえらそうに座ってるんだよ！

「だから俺が聞きたいのはそこじゃなくて、何でお前が俺に憑依して、その『電王』とやらに変身して敵のイマジンを倒したかってなんだよ！」

つつい声を荒げてしまう誠斗をジークは片手で制し、説明を再開

する。

「『電王』、とは我々イマジンが人間に憑依し、その体を借り変身して怪人を倒す存在のことだ。私が高貴な役目を果たして、何が悪いというのだ？」

「だからぁ・・・はぁ・・・」

これは駄目だ、と思い深くため息をつく誠斗。

このイマジン、それなりに説明はするのだが何か的を得ておらず、話の論点が微妙にずれているのだ。

そう、焦点をそこに当てないようにするかのような・・・

「それよりお前、私に紅茶を注げ」

「なんでだよ！」

誠斗の反論を受けていながらも、構わずに紅茶を請求するように右手を誠斗に突き出す。

「・・・クソ。何なんだよ、こいつは」

「おい、早くしないか」

「うるせえ！」

文句を言いながらも、誠斗は渋々紅茶を注ぐために下へ降りることに。

キッチンで、紅茶のパックを探す。

途中で、今日は朝食とパフェ以外に何も食べていないことを思い出し、自分の昼食用にインスタントラーメンも一緒に探す。

恵理が買い溜めしているのか、なぜかパックもラーメンも大量に在庫があることを、このとき誠斗は知った。

「（・・・あのイマジン、本心はどうなんだろうか）」

本人の説明を聞く分には、こちらに対する敵意・殺意は全く無いように見受けられる。

だが、相手は未知の存在、何を考えているかは分からない。

もしかすると、無防備を装って懷に潜り込み、そこから一気に攻撃を仕掛けてくるのかもしれない。

とにかく、油断は禁物である。

今更ながら事態の深刻さを確認した誠斗は、緊張しながら自分の部屋へ戻る。

「お前、もっと知的文章は持ち合わせていないのか？ 私に見合う本が一冊も無いではないか」

ジークは、誠斗の本棚をあさっていた。

思わず手にしているおぼんを落としたそうになった誠斗だが、かろうじてそれを防ぐ。

「・・・ゴホン・・・お前、何で俺の本棚を探ってるんだ？」

「全く・・・これだから庶民は・・・」

「人の話を聞け！」

とりあえず、こいつにはそんな魂胆無いな。

そう確信した誠斗であった。

第二十八話 降臨、満を持して（後書き）

あいかわらず、戦闘シーンが上手く書けません。

大好きな王子のシーンだからちよつと頑張ったけどね！

ちよつとは小説の書き方でも勉強しようかしら・・・。

誠斗が龍騎以外のライダーに変身する案は最初からあったので、実現できてよかったです。そして王子カッコいいです。

だから、「俺、誕生！」での扱いに少し残念だったりもするのですよ。

蛇一匹を倒したら不意打ちでフェードアウトって、王子はもう少し頑張れる子だ！

・・・いまさら何を言っているのやら。

とりあえず、次回をお楽しみに。

第二十九話 散歩路（前書き）

気づいたらもう新年でした。あけましておめでとうございます。

あやうく3ヶ月も更新を停滞させるところでした。

いやー、小説を書いてる方は本当にこういうのをマメにする方なんだと、改めて尊敬しますね。

実際書いてると面倒くさくなったりすることもありして、なかなか書けなんだこれが。

ともあれ、やっと出来た二十九話、どうぞ。

第二十九話 散歩路

「なるほど、コイツがそのイマジンか」

草名護が、これまた偉そうに座っているジークをジロジロと観察する。

それに、ジークは動じることも無く紅茶を啜る。

時はジークが誠斗の家に来てから一日が経過した。

ジークは何一つ遠慮することなく誠斗の部屋を使い、また家の各用具もためらい無く使う。

挙句の果てに、誠斗を召し使いのように使う始末である。

その状況を知らせたくて（脱出したくて）、誠斗は家にRIDER、Sの皆を呼んだのである。

「この鳥に害は無いのか？」

草名護が先日の誠斗のように、気を張り巡らせて質問する。

「まあ・・・一日一緒に過ごした感じ、全然害はなさそうだけど・・・」

誠斗が頭をぼりぼりと掻きながらため息をつく。

草名護はイマイチ信用できないと複雑な表情でクッションの上に座る。

「鳥さん、一緒に遊ぼう！」

そこに、咲塚がジークに近寄る。

「一緒に遊ぶ？ 高貴で気品あふれるこの私が庶民と遊ぶなぞ、考えられん。今でもこの家を出てもっと豪華な家に住みたいところだといふのに・・・」

「そっかー、残念だなー」

しゅんと、少しだけ肩を落とす咲塚。

そこへ割り入るように、誠斗がジークの補足をする。

「えー・・・こいつは、俺がもう一回変身できるようになるまで変わりをしてくれるということで、俺の家に泊めているんですけど・・・」

「龍騎のデッキはヒビが入ってて変身できないんだっけ？」

「はい」

そういつて、誠斗はポケットから龍騎のデッキを取り出した。

「時間が経つにつれて修復はされているみたいなんですけど、まだしばらくかかりそうで・・・」

「それで、このジークイマジンが誠斗君に憑依・変身する訳ですね？」

「なるほど、ギブアンドテイクって事だね」

RIDER、Sの皆にジークの存在理由が伝わったところで、ジークがとある提案をした。

「おいお前、私は散歩がしたいぞ。このような狭苦しい部屋に閉じ込められるのには懲り懲りしているからな」

「だから何で命令口調なんだよ！」

誠斗が右拳を握り締め、ジークめがけてストレートを放つ。
と、同時にジークがエネルギー体となり誠斗に憑依することでそれを回避する。

「ふう、やはりこの人間は憑き心地が良いな」

やはりゴージャスな衣装になった誠斗は周りに一瞥もくれることなく、くるっと回転して部屋を出て行った。

「・・・どうします？」

「・・・追いかけようか」

（公園）

夏休みの最中のため、幼稚園児や小学生などの子供が数多く遊んでいる。

その中を、ジーク（兼 誠斗）はゆっくりと、悦に浸るように歩いていた。

時折微笑を浮かべ、遊ぶ子供たちを眺めたりもしていた

「・・・ふむ、やはり子供が遊ぶ姿は純粹で美しい。実に良いものだ」

立ち止まり、公園の遊具で

「{・・・フーン、お前って子供が好きなのか?}」
「!?!」

ジークの脳内に響く誠斗の声。
その事態に、少し驚き気味のジーク。

「これはどういうことだろうか？お前の精神は封じ込めた筈なのだが・・・」

「バーカ、仮面ライダーの変身者をなめんじゃねえよ。これぐらいどうってことねえな！」

「・・・の割には体の支配は取り返せないようだが、これはいったい？」

「うっ・・・！」

先手を取ったとばかりに油断していたところへジークの的を射た言葉が突き刺さり、誠斗は何も言い返せなくなる。

「そういうことだ。しばらくこの体、借りるぞ」

「うぐっ・・・」

こうして誠斗は勢いで体の主導権を奪われてしまい、意気消沈してしまう。

と、そこへ。

「ブベベ、ブベベ」

「ブベェ」

「ブバ、ベベ」

のっそりとした鈍い動きで、白色の怪人が集団で現れた。
ヤゴ型ミラーモンスターである『シアゴースト』である。

「キャアアアー！」

シアゴースト達は耳に残る怪奇な鳴き声を発しながら、公園の人々ににじり寄っていく。

公園で遊んでいた子供たちやその親たちも続々と叫び声をあげながら逃げていく。

そこでジークは見た。

逃げていく子供の目には涙が浮かんでいることを。

さらに逃げる過程でこけて、膝を擦り剥いて怪我をしてしまった子供もいることを。

「・・・これはいただけないな」

ジークは一切の間を入れずにベルトを腰に装着。
そして、「ライダーパス」を取り出し・・・

「・・・変身」

{Wing Form}

電子音の後、ジークの体にアーマーが装着され、「仮面ライダー電王」に変身完了する。

「来い、三下共よ」

言いながらジークは「デンガッシャー」を「ハンドアックス・ブーメランモード」に組み立てる。

そして颯爽と怪人の群れに飛び込み、連続で攻撃を浴びせていく。
その姿はまさに「華麗」である。

「ブベベベ！」

「ベベベ！」

「ふむ、この程度か」

{Full Charge}

ジークがパスをバツクルに「セタツチ」し、デングァッシャーにエネ
ルギーがチャージされる。

「はああ！」

ハンドアックスとブーメランを2つの剣のように扱い、シアゴース
ト達を一撃の下に切り伏せていく。

そうして、最後の一体を切り倒すと同時に連鎖爆破のように全ての
シアゴーストが爆発して消滅した。

それを確認したうえで、ジークが変身を解除しようとした。
その瞬間。

「いんやー！すごい、すごい」

どこからともなく、誰かの声と拍手が聞こえてきた。

ジークは訝しげに辺りを見回す。

そして、木陰から姿を現したのは・・・

「あの量を一瞬で倒すなんてさすがだよ。ま、俺でも余裕だね♪」

「・・・誰だ、貴様は」

龍騎と同じ規格で紋章の違うベルト、茶をベースにしたカラーリング、そして頭にそびえる2本の角。

「ん？俺はインペラー。『仮面ライダーインペラー』、よろしくね」

第二十九話 散歩路（後書き）

王子かっこいいッス。

王子のフルチャージはこういう使い方も出来ると思うんですよ。
双剣連撃的な。

双剣といえば、ガタツクを思い出しますね、かがみん。

そんなこんなで、インペラーが登場しました。

佐野さんは最後まで可愛そうなキャラだった・・・（泣）

と、いうことで次回をお楽しみに！（なんか強引な終わりk（r y

第三十話 突然の怒り（前書き）

言わずともわかる様に、更新が1ヶ月に1回ペースになってきました。

たった少量の文章を書くのに1ヶ月って・・・自分はなんなんでしょうね。

まあ、それでもマイペースに更新は続けていくので、偶然この記事を読まれた方は応援よろしくお願いします。

それでは第三十話、どうぞ。

第三十話 突然の怒り

「なんだあいつ？怪しいな．．．」

突如として現れたインペラーなる仮面ライダー。

その口調は軽く、そしてジークを挑発するような言い振りだった。

「お前はと思う、ジーク？」

「．．．．．」

「．．．おい、ジーク？」

「．．．貴様、よくもその顔を再び私に見せたものだな．．．」
「!?」

突然、ジークは武器を構えなおして走り出した。
その目標は、どう見てもインペラーだった。

「ん、怖いねー。ジーク？」

「私の名を．．．呼ぶなっ！」

先ほどの冷静かつ的確な攻撃はどこへいったのか、ジークは両手の武器を闇雲に振り回していた。

その攻撃をインペラーは受けるわけもなく、悠々と避ける。

「おい、ジーク！しっかりしろ！」

「うおおお！！」

誠斗の忠告も聞かずに、ジークの猛攻は続く。

しかし、攻撃をされている当の本人であるインペラーは、もう飽きたと言わんばかりに、うんざりとした声を出した。

「はぁ・・・そう熱くなるなって。たかが人一人が消えただけじゃん？ しかも大分前の話だしさぁ・・・」

「黙れ！」

インペラーはジークの大振りをひょいと避け、後ろへ下がって距離をとった。

そして、自身の変身を解除した。

現れたのは、茶髪でひよろつとした青年。

「今日はただ遊びに來ただけだからもう帰るよ。じゃあねー」

そう言ってズボンのポケットから銀色の筒を取り出し、ポイツと地面に投げ捨てた。

銀色の筒は地面に触れた瞬間、外装がはじけ飛んで大量の煙が放出された。

それにより視界が妨げられ、ジークはインペラーの男を見失う。

ジークは両手のデングァッシャーを乱暴に振り回して煙を払うが、既にその場に男はいなかった。

と、タイミングを見計らっていたように誠斗が・・・

「・・・いい加減に・・・しやがれっ！」

「なに！？」

誠斗が自力でジークを体外に押し出した。

予想外のことだったのか、実体を得た後にジークは少しよろけた。

「・・・いい加減に説明しやがれ、あいつは誰だ？ お前とどんな関係にある？」

「・・・私は少し疲れた。もう散歩はやめだ」
「おいジーク！」

ジークは足早に、誠斗の家へと戻っていった。
誠斗は頭を掻き毟って、しばらく辺りを見回した後、仕方がなく家へ帰ることにした。

「・・・なんだか危険な臭いがするよ、威伊塚」

「ええ、木陰からひっそりと見ていた限り、いい雰囲気ではありま
せんね・・・」

「・・・どうする？」

頭に小枝を突き刺し、草むらに身を潜めて誠斗らの行方を見守って
いた咲塚達。

傍から見れば変態変質者にしか見えないが、あくまで彼らは大真面
目である。

「どうやら、私達には立ち入れない話のようですし、ここま一旦2
人だけにしてあげましょう」

「あの、インペラーとかいう変なライダーは？」

その単語を聞いた途端、草名護が勢いよく立ち上がって、拳を手の
ひらにうった。

「そいつは俺が殺る。・・・最近骨のあるやつがいなかったからな
あ、ふふふ・・・」

そうつぶやきながら草名護は一人で何処かへ行ってしまった。

「・・・草名護、性格変わったよね」

「・・・彼も自分の性格が良く分からないんでしょ」

（誠斗宅）

「・・・ほい、コーヒー」

「うむ、ごくろう」

先ほどの高揚が嘘のように、静かに淡々とコーヒーを啜るジーク。対して、誠斗は釈然としない気持ちを抱えてなんとも煮え切らない気分で、ベットに乱暴に身を投げる。

だが8月初旬の太陽は、そんな誠斗の心情を嘲笑うかのように日光を降らし続ける。

スッキリしない気持ちと、降り注ぐ熱に板挟みにされた誠斗の脳みそは、早々にオーバーヒートを起こして考えることを停止した。

コーヒーを啜る音が静かに響く中、ベットの上で汗を掻いてボーっ
としていると――

――気付いたらお月様が昇っていた。

「・・・まじか」

顔だけねじって横を見ると、ジークは静かに読書をしていた。
すぐそばには、空になったカップが置いてある。

「おいお前、コーヒーがなくなったぞ。注いで来い」

「・・・ヘイヘイ」

寝起きで抵抗する気力をおきない誠斗は、のそりとベットから起き上がると空になったカップを手に取り、スタスタと下の階へと降りていった。

「・・・ふう、お前がいないと生きることも辛い・・・我が友、陽太郎よ・・・」

ぽつりとつぶやいたその言葉は、ジークしかない部屋に、静かに反響した。

第三十話 突然の怒り（後書き）

今回は話と話の間みたいな感じで、正直よくわかんない回になってしまいました。

まあ、それっぽいことをほのめかせただけ良しとしましょう。

このジークってキャラ、いざ出すと扱いにくいです。

どうも番組っぽい感じにしようとしても、ちよくちよくイメージからずれていくような・・・、そんな気分にとらわれながら書いています。

もっと上手にキャラを描けるように頑張りたいものです。

それでは、また次回で。

第三十一話 真実はいかに（前書き）

すっかり遅くなりましたが、三十一話です。

いやあ、最近は4月にもなるってのに寒いですね。

これはそろそろヒートメモリでも使わないと自然環境がおかしくなるんじゃないでしょうかね。

なんてふざけたことを書いてたり。

それでは第三十一話、どうぞ。

第三十一話 真実はいかに

「（結局、ジークからは何も聞けずじまいだったな・・・）」

翌日、誠斗は恵理が一日いないとのことなのでジャンクフード店へ朝食を買いに来ていた。

時刻は既に10時を回ろうとしていたところなので、店はあまり込んでいない。

カウンターで受け取った商品入りの紙袋を右手にぶら下げて、裏路地を歩きながら昨日のことを思い出していた。

——・・・貴様、よくもその顔を再び私に見せたものだな・・・——

——私の名を・・・呼ぶなっ！——

——そう熱くなるなって。たかが一人が消えただけじゃん？——

「（・・・人？）」

そのときに、誰か一般人が戦いに巻き込まれたわけじゃない。

つまり、それは昔の出来事ということになる。

そして両者のやり取りから、過去に二人は会ったことがあるということが分かる。

しかし、それはジークにとって苦痛な思い出でしかない様子だった
が・・・。

それ以前の問題として、あの「インペラー」と名乗るライダーは一

体誰なのだろうか。

ジークの激昂ぶりからして、おそらく味方ではないだろう。それなら、自分達を「Black Khos」と呼称していた「デルタ」や「サソード」と仲間なのだろうか・・・？その仮説が正しいのであれば、インペラーがジークに接触したということは再び何かを起こす予告ということも考えられる。

「気を引き締めねえと・・・」

そう思った矢先。

「お前のライフエナジー・・・頂くぞ！」
「うおっ!？」

突然、ファンガイアが誠斗を急襲した。

ファンガイアが、『ライフエナジー』と呼ばれる人間の生命エネルギーを吸収するとき用いる、巨大な牙のような物体『吸命牙』が、誠斗の首筋めがけて飛来する。

その切っ先が首筋に喰らいつくか否かのギリギリで、誠斗はその攻撃を回避する。

誠斗の首筋では、「吸命牙」が掠った痕が赤くヒリヒリと腫れていた。

「全く・・・こっちは考え事の真っ最中だったのによ・・・」

ぶつぶつと愚痴る誠斗ではあるが、冷静に見るとやや危険な状況である。

龍騎への変身が封じられている今、誠斗は一般人と同じ、いや並みの大人よりも弱い存在である。

最悪の終わりを想像して、冷や汗をかきながらも、誠斗は右足を後

ろへ振り上げた。

「(戦う力が無い今、俺に出来る選択と言えば――)」

――逃げるしかない。

そう決意した誠斗は、右足を思いっきり地面に叩きつけ、地面の石ころを蹴飛ばした。

加速した石つぶてはファンガイア目掛けて飛ぶが、たかる虫を手で払うかのように、軽々と一蹴された。

だが、誠斗の狙いはあくまで逃走。

今の抵抗で出来た一瞬の隙で、誠斗は全力で走り出した。

その態度にややイラついたファンガイアは、後ろから誠斗の背中を撃ち破ろうと、射撃を始める。

後ろから飛来する弾に対し、誠斗は曲がり角へ飛び込むようにして回避をした。

弾は全て外れ、外壁や地面に当たった。

「・・・なめるなよ」

曲がり角へ入り、そのまま逃げ切れると確信した誠斗はチラッと後ろを振り返る。

だが、振り向くと同じタイミングで、何かが真横を通り過ぎた。

それも、並大抵の速さではなく、かなりの高速で。

嫌な予感がした誠斗は、ゆっくりと前を見直す。

するとそこには、先ほどまで曲がり角の向こうにいたはずのファンガイアが、すぐそこにいた。

「ファンガイア族の中でも屈指のスピードを誇るこの『シープ』から逃げ切れると思うなよ?」

自身を「シープファンガイア」と名乗ったファンガイアは、再び銃を誠斗に向けて構えた。

万事休すか。と、ぐっと全身に力をこめて、誠斗は来るべき攻撃に備えて身構えた。

しかし。

「大丈夫！？誠斗！！」

誠斗の後方から、よく聞く声が響いた。

再度後ろを向くと、ファイズに変身した咲塚の姿があった。

その声を聞いた途端、緊張が切れたのか、意識もせずに自然と尻餅をついてしまった。

「なんだお前は？まあどうでもいいが・・・邪魔をするなら消し去るまでだ」

そういつて、シープファンガイアは再び、持ち前の高速移動をはじめた。

辺りを動き回って、ファイズの照準をずらす作戦であろう。

「・・・なるほど、いいよ受けて立つ」

まるで遊ぶ前の子供のような、楽しげな口調でファイズはそう言った。

そしてファイズはいつ練習したのだろうか、感心するほど素早く、慣れた手つきで「アクセルメモリ」を「ファイズフォン」に挿し込んだ。

〔Complete〕の電子音の後、ファイズの胸部アーマーが展開、全身を走るフォトンストリームが銀色に変化して、「アクセル

フォーム」へと変化を遂げる。

「行くよ、羊君」

Start Up

走り回るシープファンガイアを一瞥し、ファイズは「ファイズアクセル」のスタータースイッチを押した。

瞬間的にファイズの全身は超加速し、1000分の1の世界へと突入した。

すると、驚くべき速さで動き回るシープオルフェノクの動作に、悠々と追いつけるようになった。

「何だ?!? 俺の速さについてこれるなんて・・・」

「違うよ。ついていてるんじゃない。」

・・・とっくに追い越してるさ」

隣を追い越し様に「ファイズエッジ」で連撃を喰らわせる。

その勢いに押され、驚愕の表情のまま、シープオルフェノクは真横の壁に激突した。

「終わりだ」

Exceed Charge

「ファイズフォン」から、フォトンストリームをつたって「ファイズエッジ」にエネルギーがチャージされる。

そして、壁に埋もれているシープファンガイアに対して、無常にも程があるほどの連続斬りを浴びせた。

3・・・2・・・1・・・Time Out

「く……そ……！」

ラッシュの最後の一撃が終わると同時に、アクセルモードが終了し、シープオルフェノクはΦの文字を浮かべて爆散した。

誠斗はしばらく放心状態で爆炎を見つめていたが、ファイズが変身を解除してこちらへ振り返ったのをきっかけに、自分が尻餅をついていることに気づいて立ち上がった。

「あ、ありがとうございます、咲塚さん」

「いや、あぶなかったね。見張っててよかったよ」

「……見張ってた？」

「あ、いや、えーっとねえ……」

話是这样だ。

昨日、ジークと共に家を出て行った誠斗を咲塚、威伊塚、草名護の3人で尾行した。

すると、謎のライダーに襲われ、戦闘終了後にジークと誠斗で喧嘩をした様子で。

草名護がどっか行って。

仕方が無いから2人でどうするか考え合って。

その結果、とりあえず2人を監視して、何か『向こう』からの接触が無いかを調べていた。

「『向こう』ってのは、もちろんあの「インペラー」とか言うライダーのことね。おそらく「Black Khos」と接点のある奴だろう？」

「はい……、多分それが正解だと思います」

「でも、まさか見張ってる間にただの怪人が襲い掛かるとは……」

「ははは……」

・・・ただの怪人？

たしかに、あのファンガイアは無差別に俺を襲ってきたように見えた。

だが、人通りの無い裏路地を歩いてくる奴を襲うために、わざわざ潜伏しているだろうか。

いや、普通の怪人なら分からないが、あのファンガイアはとってもそんな性格じゃない。

しかも、逃走した人間をわざわざ追ってくるなんて・・・。

「まるで、誠斗を襲うように仕向けられた様な・・・みたいな？」

「・・・超能力開眼」

「違うよ。ただ、誠斗は小難しい顔をしてたからさ、そんな事を考えているのかなってね」

2人は、そろって苦笑いをした。

（誠斗宅付近）

「なんだこの数は！」

咲塚の案で、ジークを監視することになった威伊塚は、作戦通りに誠斗宅の近くで待機をしていた。

するとどうだ、突然殺気を感じて身構えた瞬間に、大量のミラーモンスターどもが襲い掛かってきたではないか。

「ははははは！お前らの考えてることなんてお見通しだよ！だが残念だったね、俺の標的はあくまでジークただ一人なんだよ！」

高らかに叫ぶインペラーをよそに、威伊塚は威吹鬼に変身して必死に応戦するが、彼の武器は銃。対多数の戦闘にはあまり向いているとは言えない。

「くそっ！」

とりあえず、弾丸を撒き散らしながらジークから怪人の群れを引き離す。

そう考えて威伊塚は再び気を引き締めた。

「・・・さて、全くもって想像通りにことが進んじやったよ。思惑通り過ぎて怖いねえ」

インペラーは、怪人が過ぎ去った静寂に身をたっぷりと浸して、ゆっくりと誠斗の家に向かって歩き始めた。しかし。

「・・・おい、貴様。あんな雑魚を仕向けて本人は影から出てこずなんてふざけたことはいわねえよな？」

「・・・これ、全くもって想定外だったよ」

インペラーの背後には、「イクサカリバー」を強く握り締めて、これまたゆっくりと歩いてくるイクサの姿があった。

第三十一話 真実はいかに（後書き）

まあ、次回に続くといったかんじの終わり方ですね。

正直、話の軸がしっかりしていないので、進行が不安定ですね。こんなんで大丈夫なのだろうか。それでも私は謝らな（ry

こんな調子ですが、未永く見守ってくださいな。
それではまた次回まで。

第三十二話 イクサvsインペラー（前書き）

最近、自分の書き方が変わってきている気がしてなりません。
それが良い方向へ向かっていれば良いんですが・・・。
そんな不安を抱えながら書き上げました。

それでは第三十二話、どうぞ。

第三十二話　イクサvsインペラー

「あれ、おかしいなあ。お前にはBlack Khas所属のライダーを仕向けて足止めをさせといた筈だけど？」

「だから、雑魚に興味はねえんだよ」

そういつてイクサは、気だるそうに懷からあるものを取り出す。

それは、黒い蟹のようなマークの描かれたカードデッキだった。

龍騎や目の前のインペラーと同じように、カードデッキで変身するライダーと戦い、勝利して戦利品としてこのカードデッキを取ってきたのだろうか。

気だるそうにして、それをインペラーの前に放り投げた。

カードデッキは地面に落下した後、溶けるようにして消滅した。

「やっぱりあいつには無理だったかあゝ。割と戦闘センスはあると思っただけどなあ」

インペラーは、どうでも良いというように、さも飄々と同胞の死を口にする。

その声色からは一切の悲しみや怒り、憎悪といった感情を感じ取ることができない。

口では賞賛していたが、所詮は使い捨ての雑兵とも思っているのだろう。

対して、その台詞に苛立ちを感じているように、イクサは舌打ちを一回。

そして、手に持つカリバーをゆっくりと体の前に構えて、戦闘態勢をとる。

もはや彼にとって、過去の敵などはただの敗北者という認識でしかないのだろう。

一瞬の沈黙。

そして、またすぐに時は動き出す。

先に動いたのは、カリバーを振り上げたイクサだった。

何の迷いも無く、目の前の敵目掛けて全速力で走り出す。

地面の塵や砂利が、凄まじい勢いで蹴り飛ばされていく。

それに対してインペラーは、静かに、そして小刻みにステップをはじめた。

そして激突。

助走でつけた勢いを全く殺さず、弾丸のように一直線に突っ込み、イクサは恐ろしい速度でカリバーを振り下ろす。

並みの敵ではまず回避不能な速度で、なおかつ威力を持った一撃だった。

イクサ自身もそれを理解したうえで、一切の慢心と油断を無くして放った。

「!？」

しかし、外れた。

正確に言えば、受け流されたのだ。

常に警戒していたインペラーの両腕ではなく、完全に予想外の視界外であった両足によって。

しかも、振り下ろしたカリバーの側面付け根辺りに右足、そして添えられるようにして峰の先端部分に左足が乗っていた。

一体、どうやったら今のタイミングでこのような受け流し方が出来るというのだろうか。

その疑問が頭を一瞬だけよぎったとき、相手はすでに行動を起こしていた。

「ふっ・・・はぁ!!」

インペラーは、側面に当てている右足を思い切り左方向へ振り切り、イクサの進行方向を微妙に変えてバランスを崩させる。

そして、自分自身が今度は右方向へ思い切り回転し、相手の手からカリバーを奪う。

支えを失ったカリバーは、回転の慣性にされるがまま、両足からすりりと抜け出して宙に舞った。

その一連の、予想外かつ完璧な受け流しからのカウンターに驚愕して、イクサはすぐに次の行動へ移ることが出来なかった。

その隙が見過ごされるはずも無かった。

地面から僅かほどの位置で高速回転しているインペラーは、地面に着けた左足を軸にしてコマのように回り続け、そのままイクサに強烈な右回転蹴りを放った。

とっさに振り上げた両腕のガード越しに喰らっても、勢いは殺せなかった。

踏ん張っていた両足が地面から引き剥がされ、イクサの体は遙か後方まで吹き飛んで太い樹木に激突した。

「がっ・・・!」

「ああああ・・・面倒くさい。今、お前と戦ってもこっちとしちやメリットが無いんだよねえ」

そういつて、これまた面倒くさそうな仕草で右手を振り上げる。

瞬間、背後から3匹の怪人が飛び出してきた。

レイヨウ型ミラーモンスターの『ギガゼール』『メガゼール』『オメガゼール』だ。

3匹は、三角形に囲むようにして、イクサの周りに着地する。

「はぁ・・・時間を数分無駄にしちゃったじゃん。とりあえずお前

は、ここで死んでくれるかな」

3匹のモンスターは、やる気をなくした主人にうって変わり、今にでもイクサに飛びついて喰ってやろうという感じだった。その姿に、インペラーも微笑気味に肩を揺らしている。

そう、お前なんてすぐにでも殺せるぞ。とでもいったように。

「・・・・・・・・ろす・・・・・・・・こ・・・・・・・・す」

殺す。

イクサの、ストレスやダメージやプライドや、その他いろいろな理由によりブチ切れた血管と、制御不能になった脳みそからたたき出した結果がそれだった。

もうその一単語しか頭には浮かんでこない。

煮えたぎる血液は、意識や細胞までも活性化させ、動く活力を十二分に与えてくる。

先ほどまで全身に響いていた両腕のダメージも、今は全くといっていいほどに感じない。

本能的に動いた右腕は、ベルトに備えられているフェッスルを抜き取る。

腹の立つ奴らを吹き飛ばすための、銀色をした『ナックルフェッスル』だった。

それから、ゆっくりと、左手で野面の雑草を引きちぎるぐらいの力で地面を握り締め、ゆらりと立ち上がる。

その殺意で満ち溢れる全身に、先ほどまで浮かべていた微笑を消し、インペラーは警戒の色を強めた。

「殺す・・・この場で、お前ら全員!!」

「イ・ク・サ・ナツ・ク・ル・ラ・イ・ズ・アツ・プ」

怒号と共にフエッスルを読み込ませ、イクサは「イクサナツクル」をバツクルから抜き取る。

全身のエネルギーがナツクルに一点集中され、爆発的な破壊力を生む出す。

イクサ第2の必殺技「ブラウクン・ファング」である。

「ぜああああああ!!」

「!!」

気迫のこもった叫び声の矛先は、イクサの真正面を陣取っていたメガゼールにぶつけられた。

先ほどの攻防よりもさらに素早い、目にも留まらぬ速さで打ち出された拳は、いとも簡単に一体の怪人を粉々に吹き飛ばした。

その光景に一瞬だけあっけにと取られてしまったオメガゼールは、第2の犠牲者（表現がおかしいが仕方ない）となってしまった。

ナツクルに溜まっているエネルギーは、収まらない怒りを体現しているかのようにあふれ出ており、二体目のオメガゼールをも一瞬のうちに消し飛ばす。

「・・・おゝ、怖いねえ」

先ほどより僅かに気の張った声をあげ、インペラーは再び右手を振り上げた。

するとどうだ、今度はたった3匹だけではない。

もっと大量に、10匹ほどのレイヨウ型ミラーモンスターが姿を現した。

自分の周りを警戒に飛び回っているモンスター達をぐるりと見渡し

た。

それからバックルに手を当てて、カードを一枚引き抜いた。

「こいつら全員を従えられるのが俺の長所だね。・・・さすがに勢いだけじゃ押し切れないっしょ」

〔SPIN VENT〕

そういつて、右足の脛にセットされている召喚機『ガゼルバイザー』にカードをベントインした。

呼び出されたものは、インペラーの契約モンスターであるギガゼールの角を模した2連ドリル『ガゼルスタップ』であった。

右腕に装着されたそれは、角の先端を鈍く輝かせている。

その輝きは、怒りで我を忘れていたイクサの煮えたぎる気持ちを押しさえつけるのに、十分な効果を發揮した。

「それじゃ・・・行くぜえ？」

先ほど、敵の華麗なカウンターで武器をはじかれているイクサはまさに丸腰。

頼りになるものは、集中と緊張により限界まで握り締められているナックルただ一つだった。

その軽装に対して相手は10を超える怪人の群れと武器をはじいた張本人であるライダー。

「・・・チッ」

状況が非常に悪いことは、誰にでも分かることだった。

相手の威圧で熱の引いていたイクサは既に、どう対処するかをで考えていた。

「（適当に逃げながら撒くか・・・それとも陣形を崩して一体ずつ処理してくか・・・）」

必死にアイデアを浮かべようとしているこの瞬間にも、相手との距離は刻々と縮まっていくばかり。

イクサ自身もジリジリと後退しながら、この絶望的な状況から抜け出す打開策は無いものかと、頭を振り絞る。

そんな最中である。

ふと目線を送った先に見えたものは、一筋の紅い閃光。

続いて、辺り一帯に響き渡る、澄んだ笛の音色。

インペラーは微かに首を傾げ、チラリとイクサから視線をはずした。その隙だった。

インペラーが、影響は無いだろうと判断してまたすぐに視線をイクサに向けたとき、予想外の展開が起こった。

イクサがナツクルを振りかぶり、今にも第3撃目を放とうとしていた。

もちろん、周りのモンスター達は即座に反応し、イクサへ攻撃を仕掛けようと一点へ集まっていた。

「（何故今になってあんな行動を・・・まさか!?!）」

「もう遅えよ」

「ギギッ!?!」

「!?!」

インペラーの予感的中した。

今まさにイクサへ攻撃を仕掛けようとしているモンスターの群れに、大量の赤い鬼石と紅いポイントが突き刺さった。

「「たあああ！！！」」

そう、インペラーが無視した閃光と音は「ファイズ」と「威吹鬼」が駆けつけてくれた合図だった。

イクサはそれをしつかりと受け取り、2人による集中攻撃を成功させるために、隙を見てモンスター達を一箇所に集めさせたのだ。

鬼石を喰らったモンスターは、威吹鬼の「音撃管・烈風」から放たれる「疾風一閃」による清めの音を浴び、一気に爆散した。

同時に、ポイントされたモンスターは、アクセルファイズの必殺のどび蹴り『クリムゾンスマッシュ』を次々に喰らい、体内の組織を破壊されて灰となって消滅した。

不意打ちにも近いが、敵もそれ相応の襲撃をしてきたのだから当然の対応だろう。

「草名護、まだ生きてる！？」

「ふん、当然だ」

「結構ピンチに見えましたけどね？」

こうして3人のライダーが集結し、一気に形勢は逆転。

インペラーはピンチに追いやられた。

「（まずいな・・・これは想定外だ・・・なんにしても、ジークだけは確実に抹殺しないと・・・！）」

右腕のガゼルスタップの輝きが、先ほどよりぐもっているような気がして、インペラーはスタップを一振りする。

自分の契約モンスターであるギガゼールは、もしも倒されてしまったら自分のライダーとしての力が一気に減退するため自分の近くに置いているため何とか生き残っている。

その他にも、2匹だけが先ほどの集中砲火を避け生き残っている。そういえば、威吹鬼を倒しにいったレイヨウ型のミラーモンスターは一体も戻ってこない。

あの不利な状況から威吹鬼がなんとかして隙を作り、今のように射撃を喰らったのだろうか。

なんにしても、インペラーには絶対に『任務を遂行しなくてはいい理由』がある。

全身から冷や汗が吹き出始める。

そんなとき。

「・・・お前は・・・」

ふらっと。

木陰からジークが姿を現した。

ファイズ達からすれば最高にバッドタイミング。

だがインペラーからすれば・・・

「――完璧だよ、ジークウウー!!」

ガゼルスタップの2本の角が、再び輝きを取り戻した。

その矛先は、もちろん白の王子へ。

第三十二話 イクサvsインペラー（後書き）

インペラーTUEEE!

このような感じに、インペラーをすごい強いライダーにしてみました。

ミラーモンスターをいっぱい連れているところとか、かなり有利な気がするんですけど、本編ではなんであんな悲惨な終わり方になってしまったのか・・・。

そう思っってこんな感じにしてみたんですけど、結局は逆転しちゃいましたね。

それではまた次回まで。

第三十三話 名前のわからない感情（前書き）

この量の文章を書くだけでも、かなり手間がかかります。

なのに、これを遥かに上回る分量を書いてらっしゃるプロの方は、どれほどの手間をかけているのでしょうか？

今回の話を書いている最中に、ふとこんなことを思いました。
どうでもいいですけど。

それでは第三十三話、どうぞ。

第三十三話 名前のわからない感情

時は少しだけ遡り――

ジークは、誠斗が買い物へ出かける前に注いでいった紅茶を啜りながら、読書をしていた。

といっても、読んでいる本は誠斗のものではなく、恵理の部屋から無断拝借したミステリー小説である。

窓から差し込む優しい日光に包まれながら、比較的厚めのその本を、ゆっくりと一ページずつめくっていく。

パラリ、パラリと――

「・・・今日は祭りごとでも行われているのか？」

やけに外が騒がしかった。

静寂はかき消され、読書への集中力はじわじわと削れていった。

重いため息を吐いて、仕方がないとばかりに騒音が何なのかを聞き分けてみる。

大量の足音や銃声、コンクリートが壊れる破壊音、異様な鳴き声までもが聞こえてきた。

と、ここまできてジークは、これは大規模な戦闘が行われているのだと気がついた。

だがジークはそれらを全て無視して、読書を再開した。

しかし、一度気にし始めたものから再び注意を外すのは、これがなかなか難しい。

たしか、この家に泊まる代わりに誠斗へ憑依し「仮面ライダー電王」となって怪人を倒す、などという契約を交わしていた気もしたが、当の本人である誠斗がいないのだからそれも叶わない。

簡単に言うとかやる気がない、だが読書の妨げになるのは許せない。
二度目の、今度はかなり深いため息を吐いて、ジークは重い腰を持ち上げ、騒音のする方へとゆっくり出て行った。

「ちょっと威伊塚が心配になってきたから一足先に戻るね」

どこか危機感を覚えたような言い方でそう告げ、変身も解かないままどこからか現れたバイクに乗って颯爽と去っていった咲塚を見送ったのは、つい先ほどのことだった。

突然、路上でファンガイアに襲われるという出来事のせいですっかり忘れていたが、自分は朝食を買いに行っただけだったのだと思い出し、あわてて左手に携えた紙袋の中身を確認する。

ジャンクフード店で購入したファーストフードのハンバーガーやポテトが、まだほんのりと熱気を放っていることに安堵した誠斗は、再び路地を歩き出した。

また何かしらの暴漢に襲われても困るので、今度はしっかりと周りを確認しつつ、表の大通りへ出た。

ここから自宅までの所要時間は約10分。

まあ走ればもっと早いのだが、今はセミが騒がしい8月。

手加減を知らない太陽のおかげで、灼熱の日光が照りつけている。

そのサウナ状態の中を走る気力は、先ほどの戦闘で全力疾走した誠斗に残ってるはずも無かった。

そんなことを考えていると、真面目に歩く気すら失くした誠斗が出した答えは・・・

「近くの公園で涼んでいこ・・・」

——こうして、特に共通性もなく行動した二人。
だが何の因果か、意もせず二人の行動は一致してしまう……。

「——完璧だよ、ジークウウ!!」

インペラーは、目の前の三人が気をそらされて行動を停止している
この時間を見逃さなかった。

自分の目的はあくまでジークの抹殺、面倒くさいライダーを相手に
することではないのだ。

目線を目の前のライダー達から外し、次の瞬間には地面の土を蹴り
飛ばしていた。

20メートルはあったであろう距離が、一瞬にして縮まる。

そして、後はこの「ガゼルスタップ」の2連ドリルを突き刺すだけ。
この素早い一連の動作に対し、ジークは驚嘆だけで何も対応できて
いなかった。

それを見た彼の脳裏には、既に純白の体を血で染めた白鳥の皇子が
浮かび上がっていた。

だが……。

「何突っ立ってんだよ!!」

「!?!」

ジークが姿を現した木陰とほぼ同じところから、勢いよく誠斗が飛び出してきた。

そして勢いもそのままに、棒立ち状態のジークと激突する。

ジークは無抵抗にその衝撃を受け、誠斗が飛び出してきたときとほぼ同じ勢いで真横に吹っ飛び、偶然にも攻撃から逃れることとなった。

しかし、その勢いの伝播は誠斗の動きを停止させてしまう。

当然、迫り来るスタップのドリルは動きを止めることも無く誠斗へと飛んでくる。

直撃すれば、死。

「お・・・お前!!」

情けなく地面に倒れこんでしまったジーク。

普段なら、突進してくるなどという失礼な行動をとった者には一瞥と叱咤を浴びせるのだが、なぜか今はそんな気は起きなかった。

それどころかざわめく感情が、自分の腕を前へ伸ばして誠斗を引き寄せようとさせるという謎の行動へ出てしまった。

その自分でも驚くような行動に違和感を覚えたジークであったが、それに対する誠斗の行動もジークを驚かせた。

誠斗は、ジークのその手を引っ叩いて引っ込ませたのだ。

その行動に対して、ジークは自分が手を伸ばしたことに對してへの疑問以上の驚愕の感情を抱いてしまった。

さらに、自分が憑依しないと変身できないはずの誠斗の左手には謎のベルトがあった。

巨大な疑問符が頭に浮かぶジークは、とりあえず急いで誠斗の表情を確認した。

そこにあつたには、弱々しい笑顔だった。

そして口だけ動かして、大丈夫、と呟いたことをジークは感じ取った。

この間、0コンマ数秒。

誠斗は、出会ってから見たことも無いような表情で（といっても、表情自体あまり変化はしないが）こちらを見るジークを見た。

その不安げな顔を見た瞬間に思いついたことは、嘘でもいいから笑って安心させるということ。

そして、自分の気持ちを伝えること。

と、いうことでとりあえず笑ってみたものの、明らかに表情が硬い。多分、誰が見ても不安しか感じ取ることが出来ないだろう。

自分で思っている以上に緊張しているのだろう。

おまけに「大丈夫」、と言ってみたつもりだが絶対に声が出ていない、完全に口パクになってしまった。

だが、少しだけだが確実にジークの表情は和らいだ。

これでいい。

誠斗は意を決して、目の前に迫り来る敵を見た。

奥にはRIDERSの三人。

あの三人相手に無傷なのだから、おそらく相当のやり手なのだろう、と理解した。

使用している武器は右手の2連ドリル。

あの鈍く光っているドリルで貫かれたら、確実に即死だろう。

考えるだけで冷や汗が出てくるが、今は自分が打てる最善の手を打つだけ。

そう決意しなおした誠斗は「今自分が打てる最善の手」である、左手のベルトを腰に巻いた。

「変身ッ!!」

〔COMPLETE〕

腰に巻きつけたベルトはもちろん龍騎のものではなく、先日、デッキにひびが入って変身できなくなってしまった誠斗へ咲塚が手渡した「スマートバックル」だった。

変身するのは、咲塚が変身する「ファイズ」と同じ系統である「ライオトルーパー」である。

だが、前回変身したときはそのステータスの低さからなすすべもなく敗退してしまっている。

もちろん、そのとき戦ったイマジンより強いであろうインペラーには勝てなことも、ほぼ確定的だろう。

それでも、出来ることが無いわけじゃない。

ジークへ向けて武器を振りかぶったつもりが、対象が入れ替わってしまったことに多少の驚きを感じていたインペラーであったが、ジークより先にこいつを殺しても任務に影響が無いことを理解しているインペラーの手元が狂うことは無かった。

そして、悠々と一言。

「死ね」

2連ドリルは、また僅かに矛先を鈍く光らせた。

「――確かに、これじゃ勝ち目がねえ・・・」

・・・だがなあ、一撃受け流すくらいなら余裕で出来んだよ!」

誠斗の行動は迅速だった。

まず真っ先に左腕を腰に回し、左腰に下げられている武器『アクセレイガン』を素早く抜き取る。

次に身を屈めて、狙われる面積を可能な限りに小さくする。

そして集中力を振り絞り、極限まで眼を見開いて相手の攻撃を見切る。

その矛先に、アクセレイガンの刃先を滑らせるようにぶつける・・・。

ガキンッ!、と凄まじい金属音が辺りに鳴り響いた直後、誠斗の体は真後ろへ吹っ飛んだ。

その全身は、先ほどのイクサのように激しく樹木へ叩きつけられ、その多大なダメージはベルトへの大きな負荷となって変身を解除させた。

「あ・・・が・・・!」

ダメージを受けたのは生身の体ではなく、変身した後のトルーパー状態であったにもかかわらず、誠斗の全身には鋭い痛みが走っていた。

ライオトルーパーは他のライダーよりスペックが劣る分、装着者の能力差で左右されるステータスが大きいため、変身が解かれた後も激しい痛みが襲うのであろう。

「（いや、違う・・・）」

インペラーにとって問題はそこではない。

「（今のを避けられた・・・？俺の最高速からの一撃だぞ・・・。いくら変身してたからといっても、避けれるスピードじゃ・・・）」

誠斗は、これほどに恐ろしいほどのやり手なのか。

いや、それはない。

こいつの情報は確認済みだが、生身はただの高校生のはず。

なら、相手の弱小加減から、自分が知らず知らずのうちに手加減してしまったのか。

様々な思考が頭をよぎった。

だが最終的に結論付けられる問題点は唯一つ。

「（最大のチャンスを見過ごしてしまった・・・！！）」

たとえば、今の一撃が決まっていたとしよう。

もちろんジークは殺せないが、誠斗は確実に抹消できる。

誠斗はジークの憑依先のようにだったから、多少なりとも情は移っているだろう。

そいつを殺されたら、『前のように』怒り狂って襲い掛かってくるか、放心状態になるかの2つしかないはず。

その状況でジークを殺すのは、あまりにも簡単だ。

だが、誠斗は生きている。

驚愕の回避テクニクで、無傷とまではいかないものの、見事に攻撃を避けきった。

ジークは驚いてはいるものの、正気を保っているのは見て分かった。今攻撃しても、抵抗するに違いない。

それに、時間を喰い過ぎた。

これ以上戦闘を続けても、すぐに後ろの3人が加勢に来てしまうだろう。

「不測が多すぎる・・・！」

これ以上は無謀だ。

インペラーはそう判断し、自慢の脚力で逃亡を図った。

任務に失敗してしまった。

だから、これ以上の失態は許されない。

これまで以上に逸る心を無理やり押さえつけて。

高鳴る鼓動は無視して。

インペラーは逃げた。

次こそは完璧に任務を遂行するために。

「ま・・・まちやが、れ・・・！」

逃げていくインペラーの背中を目で追いながら、誠斗は宙を掴むように右手を開閉させる。

だが、それで相手の動きが止まるわけもなく、痛みに負けた誠斗は腕をおろした。

「・・・お前・・・」

「・・・ん？」

朦朧とした意識の中でこちらへ駆けてくる三人を眺めていたら、不意に視界の外からジークが話しかけてきた。

首を回す力すら残っていない誠斗は、何とか動く口だけで応答した。

「・・・お前は、私を助けるために・・・そのようなことを・・・？」

「・・・んだよ、悪いかよ」

震える声でたずねてくるジークの様子に少々気恥ずかしさを感じた誠斗は、つい拗ねた様な口調で対応した。

だがそれ以降の返事は無く、次に耳へ入ってきた音は三人が駆けつけてきた足音であった。

第三十三話 名前のわからない感情（後書き）

気づいた方はいるのでしょうか。

実は前回も今回も、それらしい戦闘を全くしていません。

イクサの一撃を避けるインペラー、インペラーの一撃を避ける誠斗。この2つの瞬間を文章にしたら、なんと2話にまたがってしまいました。

まあ、自分でも書いた後に気づいたんですけどね。

でも予定では、次回は戦闘シーンが皆無になると思います……。もつと量を書けば戦闘も物語りも両立させれると思うんですけど、前書きどおり、手間のかかり具合かと自分の力量の限界からこれ以上は無理ですね。

我ながら悲しくなる……。

それでも頑張ろうと思いますので、もしこれを見てくださっているような心優しい方がいたら応援よろしくお願いします。

長ったらしくなりましたが、今回はここまでで、それではまた次回。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5447i/>

仮面ライダー ～Legend Rider Story～

2011年10月6日01時23分発行